小佐々町文化財調查報告書第1集

古田遺跡

1985

長崎県小佐々町教育委員会

小佐々町文化財調査報告書第1集

--- 長崎県北松浦郡小佐々町所在の遺跡 ---

1 9 8 5

長崎県小佐々町教育委員会





古田遺跡空中写真と遺跡遠景





発刊にあたって

このたび、当町古田遺跡に関する発掘調査の報告書を刊行することになりました。

神崎地区は本町の西側に位置し、西方へ半島状に突出したリアス式の複雑な海岸線で、ほとんどが岩礁であり、その岬の突端が日本本土最西端の地となっています。

古田遺跡は、その裏手の狭い谷あいに、砂丘が発達してできた細長い地形で営まれた、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡です。

北には、九州西岸では北限自生地と言われる「ハカマカズラ」の 下島。南には「淡水貝化石層」の野島等、西海国立公園の一角を形成する島々が点在しています。

遺跡発見のきっかけは、県文化課によって実施された昭和58年度 遺跡周知事業の際、発見されたものですが、昭和の初期、イモがま を掘る際、人骨が出土したという話もありました。

遺跡の北側は漁港として埋立て,整備され,また宅地等の開発が進行しつつある現状から,今回は遺跡の性格や拡がりを調べることにしたものです。

出土品については、別記のとおりですがその中でも古墳時代の人 骨一体が出土したことや、朝鮮半島の土器等が出土したことは、本 調査の大きな成果の一つです。

これらの出土品は、この地で生活を営んだ先人の面影を偲ぶに足る貴重な文化遺産だと思います。

私達はこのような過去の偉大なる産物を,大切に保存し,後世に 伝える使命を課せられていると確信します。

この度の発掘調査に際し、種々ご指導とご助言を賜りました県文 化課、そしてこの調査にご協力いただいた地主の方々、更に炎天下 のもと作業に従事していただいた皆さん方に衷心より感謝の意を表 し、あいさつといたします。

昭和60年3月1日

小佐々町教育長 久 保 田 實

調査関係者

小佐々町教育委員会 久保田 實 教育長

野田 国男 教育次長

橋川 龍二 公民館主事 (現町総務課)

久田 訓治 社会教育主事

金子 和代 総務係

長 崎 県 文 化 課 安楽 勉 文化財保護主事 (調査担当)

町田 利幸 文化財調查員 (調查担当)

調 査 協 力 者 長崎大学医学部解剖学第二教室 松下孝幸・分部哲秋・中谷昭二 渡辺由里子・水町裕美・赤瀬孝子・塚元春美・平戸 静・森川美保子 松尾美代子・細田純代

調 査 外 業 岡本富子・松田ハマ子・谷川静子・林ハツ子・岡本好子・寺崎稔 後藤トシ子・織田和恵子・村田ミドリ・中村真子・長嶋和代・酒井由美 吉永里美・森美砂子

調 査 内 業 森洋子・川口歌子

本報告にあたって、毎日猛暑の中調査作業に従事された作業員のみなさん、また器材置場を提供された鴨川新次郎さん、その他多くの方々の御協力をいただき、無事調査が行われたことをここに、 心より謝意を表します。

例 言

- 1 本書は,長崎県北松浦郡小佐々町楠泊免古田に所在 する古田遺跡の範囲確認調査報告書である。
- 2 調査は国庫, 県費の補助を受けて, 小佐々町教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査は、小佐々町教育委員会を主体とし、長崎 県文化課が協力して実施した。
- 4 本書の執筆は分担して行い、執筆者は本文目次の項 および各項末尾に記載している。
- 5 図版作成にあたっては、それぞれ執筆者が行ったが、 遺物写真、古墳時代の土器トレースは藤田和裕氏の協力 を得た。
- 6 遺物の写真図版はすべて約1/2で掲載する。
- 7 本遺跡に関する図面および写真類は、長崎県文化課 が保管の任にあたっている。
- 8 本書の編集は町田が行い安楽が補佐した。

本文目次

I	はじめに					
	(1)	調	査に至る経緯······1	(安楽	勉)	
	(2)	地理	里的環境と周辺の遺跡3	(")	
II	調 3	KI.				
	(1)	調	査の概要7	(安楽	勉)	
	(2)	土	層8	(町田和	制幸)	
	(3)	遺	物12	(安楽	勉)	
		1	縄文時代の土器12	(")	
		2	縄文時代の石器18	· ()	
		3	弥生時代の土器21	(")	
		4	古墳時代の土器・鉄器23	(町田和	河幸)	
	(4)	古均	費時代の遺構37	(")	
	(5)	古均	費時代の遺物分布状況39	(")	
III	長崎県	具古日	日A遺跡出土の古墳時代人骨51	(松下書	(幸章	
W	tz わり) 12	61	(+ 	<i>5</i> 4.\	

挿 図 目 次

第1図	古田遺跡位置図(安楽作成・藤田製図)
第2図	遺跡周辺地形図(安楽作成) 2
第3図	町内遺跡分布図(安楽作成) 5
第4図	調査区域図 (町田作成・藤田製図)
第5図	土層実測図① (町田作成・藤田製図)9
第6図	土層実測図②(町田作成・藤田製図)11
第7図	縄文土器実測図① (安楽実測・製図)13
第8図	縄文土器実測図② (安楽実測・製図)15
第9図	縄文土器実測図③ (安楽実測・製図)16
第10図	縄文土器実測図④ (安楽実測・製図)18
第11図	石器実測図① (安楽実測・製図)19
第12図	石器実測図② 凹石・磨石・石皿実測図 (安楽実測・製図)20
第13図	弥生土器実測図 (町田実測・安楽製図)22
第14図	土師器実測図①(町田実測・藤田製図)・・・・・26
第15図	土師器実測図②(町田実測・藤田製図)・・・・・・27
第16図	土師器実測図③(町田実測・藤田製図)・・・・・・28
第17図	土師器実測図④ (町田実測・藤田製図)29
第18図	土師器実測図⑤ (町田実測・藤田製図)30
第19図	土師器実測図⑥ (町田実測・藤田製図)31
第20図	土師器実測図⑦ 石錘・鉄器・土錘実測図 (町田実測・藤田製図)32
第21図	須恵器実測図① (町田実測・藤田製図)33
第22図	須恵器実測図②(町田実測・藤田製図)34
第23図	朝鮮半島系の土器(町田実測・藤田製図)・・・・・・・35
第24図	出土人骨実測図 (町田作成・中谷製図)37
第25図	遺物分布状況図① (町田作成・製図)40
第26図	遺物分布状況図② (町田作成・製図)41
第27図	古田遺跡編年図(町田作成・製図) … 49
第28図	調査区域と各時代の拡がり (安楽作成・製図)66

表 目 次

工即命① (門 田作成)	表Ⅰ□□
土師器② (町田作成)	表 2
土師器③ (町田作成)	表 3
土師器④(町田作成)45	表 4
土師器⑤(町田作成)46	表 5
土師器⑥(町田作成)47	表 6
須恵器 (町田作成)	表7 多
図版目次	
1 遺跡全景 (町田撮影)70	図版 1
2 古田B遺跡 (町田撮影) ·······71	図版 2
3 調査・出土状況 (安楽撮影)72	図版 3
4 遺物出土状況(安楽撮影)73	図版 4
5 土層(町田撮影)74	図版 5
6 土層 (町田撮影)75	図版 6
7 調査・出土状況 (安楽撮影)76	図版 7
8 1 号人骨出土状況(安楽撮影)77	図版 8
9 説明会・遺物出土状況 (安楽・町田撮影)78	図版 9
.0 遺物出土状況(安楽撮影)79	図版10
1 調査・出土状況 (安楽撮影)80	図版11
2 縄文土器① (藤田撮影)81	図版12
3 縄文土器② (藤田撮影)82	図版13
4 縄文土器③ (藤田撮影)	図版14
5 石器① (藤田撮影)84	図版15
.6 石器② (藤田撮影)	図版16
7 弥生土器 (藤田撮影)	図版17
8 土師器① (藤田撮影)	図版18
9 土師器② (藤田撮影)	図版19

図版20	土師器③ (藤田撮影)	89
図版21	土師器④ (藤田撮影)	90
図版22	土師器⑤(藤田撮影)	91
図版23	土師器⑥(藤田撮影)	92
図版24	土師器⑦(藤田撮影)	93
図版25	土師器⑧(藤田撮影)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	94
図版26	土師器⑨(藤田撮影)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	95
図版27	土師器⑩鉄器(藤田撮影)	96
図版28	須恵器① (藤田撮影)	97
図版29	須恵器② (藤田撮影)	98
図版30	朝鮮半島系の土器 (藤田撮影)	99
図版31	頭蓋(松下撮影)	100
図版32	下顎骨(松下撮影)	101
図版33	下肢・上肢骨(松下撮影)	102
	人 骨 挿 図 目 次	
第1図	古田遺跡位置図(松下作成・製図)	51
第2図	1号人骨残存状態、2号人骨残存状態(松下作成・製図)	52
第3図	2号人骨残存状態(松下作成・製図)	52
第4図	偏差折線 頭蓋 (松下作成・製図)	56
第5図	ペンローズの大きさ距離と形能距離・頭蓋(松下作成・制図)	57

人骨表目次

表 1	出土人骨一覧(松下作成)51
表 2	脳頭蓋計測値(松下作成)
表 3	鼻根部計測值(松下作成)54
表 4	顔面頭蓋計測値(松下作成)54
表 5	上腕骨計測值(松下作成)
表 6	大腿骨主要計測値(松下作成)57
表 7	脛骨計測値(松下作成)・・・・・・59
表 8	推定身長値(松下作成)59
表 9	推定身長値(松下作成)59
表10	脳頭蓋計測値(松下作成)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
表11	顔面頭蓋計測値(松下作成)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
表12	鼻根部計測値(松下作成)・・・・・・・61
表13	下顎骨計測値(松下作成)・・・・・・・・・・61
表14	鎖骨計測值(松下作成)61
表15	肩甲骨計測値(松下作成)・・・・・・・・62
表16	上腕骨計測值(松下作成)62
表17	橈骨計測値(松下作成)・・・・・・・・62
表18	尺骨計測值(松下作成)62
表19	大腿骨主要計測値(松下作成)・・・・・・・・・63
表20	脛骨計測値(松下作成)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
表21	膝蓋骨計測値(松下作成)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
表22	腓骨計測值(松下作成) 63
表23	四肢骨比(松下作成)
表24	歯の計測値(松下作成)63

I はじめに

(1) 調査に至る経緯

県文化課では昭和56年度から県下各地区において遺跡周知事業を計画的に実施して、埋蔵文化財を中心とした見直しと、新規の登録台帖を作製している。昭和58年10月小佐々町においても5日間の日程で遺跡分布調査を実施した。

古田遺跡はこの事業の中で新たに発見されたもので、楠泊免245番地外に所在する。小佐々町の中央からやや北西部に位置する神崎地区は半島を形成して西に伸び、その端部は北緯33°12′51″・東経129°33′17″の位置にあたり日本本土最西端の碑が建立されている。この周辺は北九十九島と言われるように大小の島々とリアス式の入り組んだ沈降海岸から構成された地形でもある。遺跡は神崎鼻の北側に位置し、南北約200m、東西の最大幅約50mの狭い谷間に、砂丘が発達して出来た細長い三角形状の地形に営まれたものである。

分布調査の折には黒曜石や弥生土器と思われる小破片を数点採集したが、その時の聞取 調査では、砂丘の先端部海岸線より、昭和の初め頃人骨出土の話を聞いた。話によると、この 付近の畑では甘藷を作っていたが、収穫時には海岸に近い所に保存のためイモガマを掘ったと

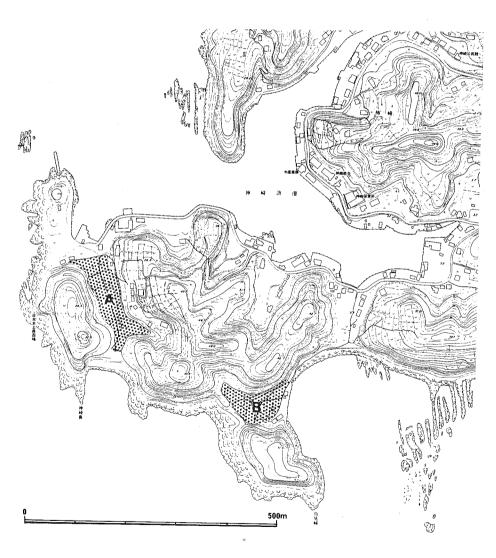
いう。その折人骨が出土して再 埋葬したということであった。 そのため少なくとも弥生の埋葬 址に関係あるものとの判断を得 たのである。一方この地点の低 い山を越えた南東側にも,湾を 南に控えて開けた平担地があり、 一部砂丘が発達している。ここ では黒曜石片やサヌカイト片 多数散布しており石斧も採集する れた。しかし土器片を採集する れた。しかし土器片を採集する れた。この両者はほぼ同地 域に位置するため前者をA、後 者をB地点とした。

以上が本遺跡の発見の経過で ある。



第1図 古田遺跡位置図

今回の調査の目的は、遺跡の北側が漁港として埋立て、整備され、宅地開発が進行しつつある状況に対拠するため、遺跡の範囲を正確に把握して保存対策の基礎資料を得ることにあった。町では昭和59年度事業として国と県の補助金を受け、昭和59年7月16日~8月2日までの17日間の日程で調査を計画した。調査は町教育委員会が主体となり、県文化課職員2名が調査を担当した。なお当初の計画ではA・B両地点の調査を実施する予定であったが日程などの問題もありA地点だけに絞った。 (安楽)



第2図 遺跡周辺地形図

(2) 地理的環境と周辺の遺跡

長崎県の北部,平戸から北松浦に至る「北松」といわれる西海岸一帯は、大小 200 の島々から構成され、九十九島と呼ばれる複雑な海岸線は多くの湾、入江、岬があって西海国立公園の一翼を担っている。

小佐々町は北に鹿町町と、南が佐世保市と境を接し東は佐々町と山地を分け合っている。303mの冷水岳からは眼下に九十九島の島々、平戸島をはじめ、西方40kmの海上には五島列島までが一望のもとに見出せる。 東側の佐々町から佐々浦に注ぎ込む佐々川は、河足が約21.5kmと県内屈指の河川となり、下流域には平野部を形成している。しかし見返橋を境に西側の町内には平野は含まれず山塊が急に海にせまっている。北松浦の一帯には新生代第三紀砂岩の浸食景が見られ、旧程30年でより崖下の岩陰がよく利用され、吉井町福井洞穴や佐世保市の岩下洞穴・泉福寺洞穴はその代表的な洞穴遺跡である。町内にもこれらの堆積岩の残丘を見ることが出来るが、小坂免の大悲観岩陰もその一つである。岩陰の北壁には第35代松浦藩主松浦肥前守(観中公)が文政13年(1830年)「大悲観」の文字を書いて彫らせたものと言われており、今なおその下に観音が祀られ信仰されている地でもある。標高20mの位置にある南向きの岩陰は、間口約15m奥行10m足らずである。昭和50・51年の発掘調査では、縄文時代の押型文・曽畑式・並木式・阿高式など早期から晩期に至る時期の土器や石器のほか弥生中期の土器や土師質の土器まで幅広く出土している。また自然遺物も獣骨や貝殻類、それに貝製腕輪が確認されている。この岩陰の北側にも、北に向って間口3m、奥行4mの良好な岩陰が見られるが、遺物の有無は明らかでない。

町内唯一の河川小佐々川と小河川の竹田川にはさまれた標高 112 mに位置する沖田城は、南北朝時代近江の豪族佐々木氏の一族か、松浦党の一族小佐々氏の居城であったとされているが、現在は沖田山神社が鎮座している。館跡があったとされている所は南へ半島状に伸びた標高10 m前後の所で、今は国道で断ち切られ、本立寺が建ち墓地などが営まれている。またこの寺の境内には弥生時代のものと思われる石棺が入口に2基、本堂の裏手の切り通し部分に1基、計3基露出しているのが認められる。地元の古老の話によれば、明治の初め頃、寺の入口付近や畑地からもかなりの石の棺が出土したということで、ゆるやかな舌状の丘陵を利用して石棺墓が営まれていたことが窺える。この丘陵の周辺は今でこそ新田になっているが、当時は海に突き出していたと思われる。小佐々川の河口には若干の河岸段丘が開け、永徳寺周辺も地形的には良い条件を満たしているが、人家などが建てこみ、遺物の採集は出来ず、今後に期待したいところである。田原免に位置する永徳寺は、永仁3年(1295)小佐々四郎が地頭矢岳大守の時佐々正興寺黙堂和尚の道風を慕い開山したと言われている。そして中世においては西彼半島多以良とも関係があったといわれ、それを裏付けるように墓地内には「青温石」と呼ばれる滑石製の宝篋印塔や五輪塔の石塔群が見られる。

臼の浦から楠泊にかけては大小の岬や半島があり、その前面には水の島、焼島、前島、野島 などが浮び波静かであるが、ほとんどが岩礁地形で遺跡は発見されていない。

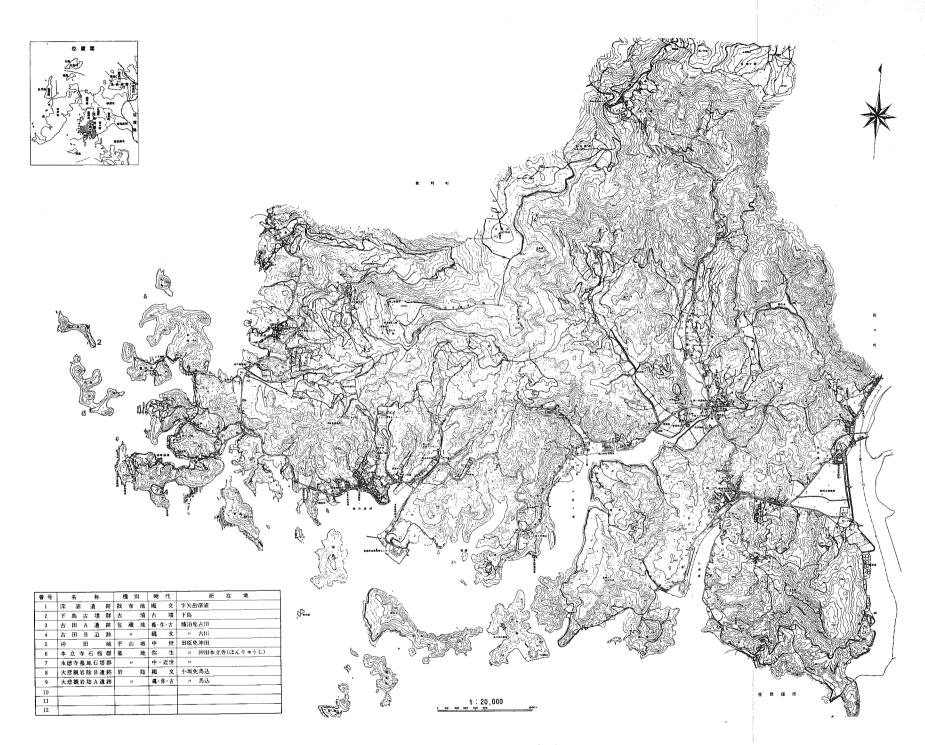
古田遺跡の位置する神崎半島は、2地点で遺物の出土が確認されているが、この周辺にはまだ小規模ながら同じような地形の所が見られ、遺跡の可能性も考えられる。北側に位置する浅島には、石の棺より鏡出土や人骨の出土の話があったが、柄をもった鏡や祖先の墓を再埋葬したという話から、近世墓と思われる。

下島には北限地としてのハカマカズラというツル性の植物が自生しているが、この島は鍵状に細長い小さな島である。細長い部分は大小の円礫で形成されている。よく観察すると礫がわずかに凹んだり、箱式棺に類似したものが見られる。これは近年になり類例が増加してきた、礫丘上に構築された古墳時代を中心とした墓地と考えられる。南は鹿児島県長嶋町の指江古墳をはじめ、県内では南串山町国東半島、長崎市牧島曲遺跡、北松的場大島の曲り鼻遺跡、佐賀県唐津市神集島などが知られ、いずれも立地条件は、海に細長く突き出した鼻状の岬の礫丘ということで一致している。いずれ調査の機会が待たれる所である。

矢岳免に位置する深浦遺跡は黒曜石が散布しており縄文時代の遺跡と思われるが土器の出土 は見られない。

以上のように町内における遺跡の概観をしたが、全体的に少ない状況である。特に中央部において空白区が見られるが、先にも述べたように、リアス式の沈降海岸のため山地が急に海にせまっており平坦地や砂丘が発達しなかったことも一因と考えられる。一方鹿町町の目暗ヶ原一帯は標高 366 mの高所にありながら多くの遺物が採集されており、本町の岳木場や冷水岳周辺においても遺物の発見される可能性は考えられる。 (安楽)

- 註1 長崎県教育委員会 『福井洞穴調査報告図録編』 長崎県文化財調査報告書第4集 1966
 - 2 佐世保市教育委員会 『岩下洞穴の発掘記録』 1968
 - 3 佐世保市教育委員会 『泉福寺洞穴の発掘記録』 1985
 - 4 1975・1976年にわたり町教委主催で佐世保考古学会調査,報告書未刊
 - 5 『日本城郭大系』第17巻 新人物往来社 1980
 - 6 小田富士雄氏より御教示
 - 7 昭和58年度遺跡周知事業において県文化課確認
 - 8 長崎市教育委員会 『曲崎古墳群調査報告書』 1977
 - 9 昭和59年度遺跡周知事業において県文化課確認
 - 10 註6に同じ



第3図 町内遺跡分布図

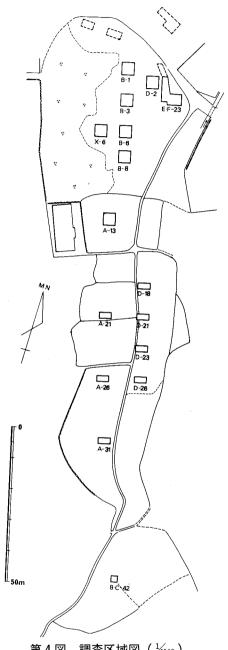
II 調 杳

調査の概要 (1)

調査は、谷状を呈した標高3~5mの平坦地 7.000m²を対象とした。現在耕作されている畑地 はわずかで, 残りは雑草や竹林の繁茂する原野 である。砂丘が形成された一番北側では幅約50 mを計るが、最奥部の三角形の頂点になった部 分では南側の海岸から吹きつけられた大礫と, 岩石のため若干傾斜をもっている。

調査方法は、平坦地をほぼ縦断する形で長軸 をとり、東西に直行する形で4m×4mのグリ ッドを組み、東西をA・B・C、南北を1・2・ 3と呼んだ。竹林などの影響で西側平坦部分に グリッドが設定できなかったが、 ぎりぎりの線 をA, ほぼ中央線にあたるところをBとした。

発掘は $B-1\cdot D-2$ から実施したが、この 区域では砂層が厚く,下層の砂利層からローリ ングした遺物が若干出土しただけであった。B -3~6では、古墳時代終末期の須恵器片や土 師器片が多く出土し、さらに貝層や焼土が検出 され、住居址の可能性も示唆された。西側の竹 林を伐採してX-6を設定して拡がりを見たが、 ここからも多くの古墳時代の資料に混じって半島 系の格子目の叩きをもつ軟式土器が出土した。古 墳時代の遺物の出土はA-13あたりまでで量が 少なくなってくる。E・F-2・3は人骨出土区で ある。人骨は聞取によればイモガマを掘った時



第4図 調査区域図(½000)

数体出土したといわれていたので,海岸部と畑の縁辺部に点線で描いた部分を確認したが, 良好な状況には至らず,わずかに小骨が出土しただけである。D-18からA-31までは殆ど縄 文晩期の資料が得られた。またこれから45m離れた最奥部のB・C-42からは縄文中期阿高式 土器と後期の北久根山式土器が出土した。 (安楽)

(2) 土 層(第5,6図)

古田遺跡における層序は、縄文時代の遺物包含層と古墳時代の遺物包含層とに大きく区分することができる。またその両時代の接点がA-13区付近にみとめられ、弥生時代後期の土器が出土している。B-1区からB-8区までが古墳時代の遺物を中心に検出され、D-18区から $B\cdot C-42$ 区までが、縄文時代を中心とした遺物の検出をみている。土層における変化をみていくと第1に破砕貝層が $B-1\sim8$ 区までみられるのに対し、 $A-13\sim B\cdot C-42$ 区においては破砕貝層をみなくなることが特徴的である。第2に古墳時代の遺物を包含する層は黒色の砂層にあり、この層を中心として上下に遺物の分布をみている。一方縄文時代の遺物を包含する層は、黄褐色砂層を中心として遺物の検出をみる点である。第3点として貝層をあげることができる。これは縄文時代の遺物を包含する地区ではみられなかったものの、古墳時代の遺物を包含する地区では、黒色土層をはさんで上下に貝層を形成していることである。またB-3区においては、黒色土層とはさんで上下に貝層を形成していることである。た。次に土層の層序について説明を加えていきたい。

第1層-耕作土層である。古田遺跡の場合砂丘の上に作物が作られていて、土地がやせており、いも、ピーナツ等の比較的悪条件で栽培されるものでないと不適当な土地がらである。しかしB・C-42付近では湧水点があり、小規模に水田耕作を行っていたとのことであった。

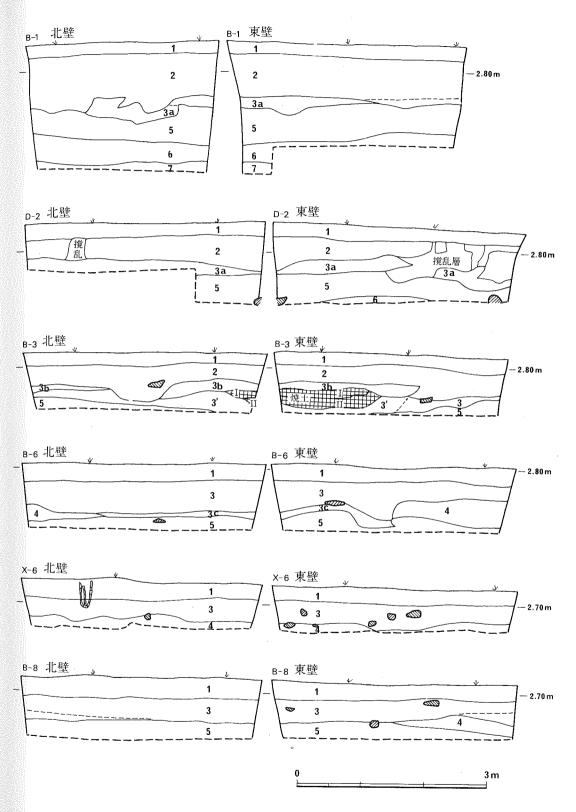
第2層-褐色砂層・ $B-1\sim3$ 区までみられる砂層で、以降南側には堆積をみない層である。これは北側海岸線がまじかにあり、風・波によって堆積した砂と考えられるものである。一番厚く堆積をみるのがB-1区で表土層下部より90cmの厚みをもってみられた。またB-1、D-2区付近は2層に攪乱が一部みられるが、これは風波をさけるための防風林が植込まれていたためとみられる。

第3層-黒色砂層(やや水分を含む)・この層は黒色を帯びる層であるが、遺物の出土をみる層と遺物の出土をあまりみない層があり、貝層を黒色土層の上に形成する層、貝層を黒色土層の下に形成するもの、焼土をみるもの等3層の遺物包含層を中心に上下に5種類の土層分類を行った。

O3 a 層 - 黒色砂層・地区でみると B-1, D-2 区にみられる層で堆積が薄く,また撹乱を受け,B-1 区では部分的に北,東壁においてとぎれた状態をみる。また破線を付した部分はやや黒みが薄くなり,2 層との区別がつけにくいために行った。遺物の出土品を見るとこの層の遺物はローリングを受けたものでしめられている。

O3b 層 - 第 I 貝層・黒色砂層上部に堆積する貝層の層である。主にカキ殻を多く混入し、また岩礁性のサザエ、アワビを含む層である。

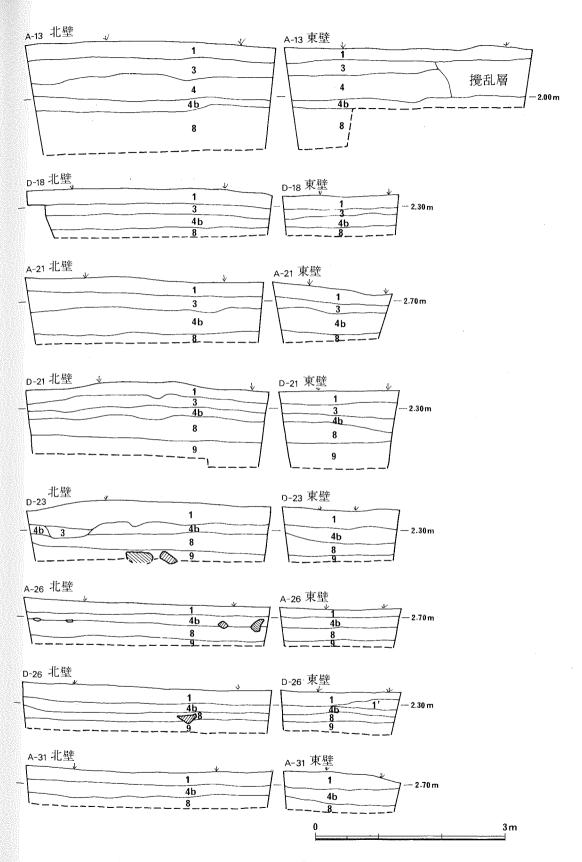
O焼土層-B-3区北、東壁にみてII層に分離できるものである。色調は赤褐色を帯びて、I層とII層の間が粘土塊を焼いた様に境界部分が固く、ねじり鎌で削ると、ポロポロ剝落する



第5図 土層実測図①(‰)

部分がみられるものである。

- \circ 3 層 暗黄褐色砂層 3 層と似かよるが、やや黄色味を帯びた暗黄褐色砂層である。 B-3 区北壁部付近で須恵器の出土をみている。
- O3層-黒色砂層 B-3~D-21区周辺までの南北約70m近い土層を形成するもので安定した堆積状況を示しているものである。もっとも厚い部分 B-6 区で約50㎝をみており、また遺物の出土点数も B-6、 X-6、 B-8 区で総出土遺物点数の約70%を占めているものである。
- O3C層-第II 貝層・B-6区で検出した貝殻をもつ層で3層の黒色砂層の下部からおもにカキ殻を堆積させた状況にあった。
- 第4層-黄褐色砂層で B-6~A-13区までの堆積と、A-13~31区までの堆積層出土遺物の時期的差があるところから、この層をB-6~A-13区までを 4層としA-13~31区までを4 b 層と名称をつけることにした。 4層は上面で数10点出土をみるが遺物の量は 3層と比較すると突然点数が少なくなるという現象をみるものであった。なおB-8区で鉄製品出土を 1点みている。
- 第4b層-A-13~31区にかけてみられる暗黄褐色砂層である。この地区から南側は、縄文時代の遺物を中心として遺物の出土をみるようになる。また堆積した砂層の質も細かい砂でなく知めの砂に変化する。
- 第5層ー混貝砂層、青みがかった砂に細かい貝殻が混じる。 $K(海岸)区, B-1\sim8$ 区まで検出している層でこの層にみる遺物はB-1区はほとんどローリングを受けるものである。が、B-8区 5層では弥生土器の底部(P-24)とみられるものが 1 点出土をみている。
- 第6層-混礫破砕貝層円礫に混じるようにして貝殻の細かい破片が堆積する。遺物の出土を みなくなる。
- 第7層-砂礫層,湿り気をもつ砂と礫が検出された。この層ではローリングした須恵器片1点出土をみている。
- 第8層-黄茶褐色砂層で粗い砂の堆積をみる。海の砂と違い河水によって運ばれた砂の状態であり、下部からは水がわきだすようになる。なおこの層の上面まで縄文時代の遺物を検出している。
- 第9層-暗黄茶褐色砂層で、水分を含んでいるためにこのような色調を帯びるものと思われる。やや砂の粒が大きくなる。またD-21区では、標高約1.5mで水がわき出す。
- 以上が古田遺跡での層序である。なおB・C-42区では表土下約40cm(標高2.75m)で地山(黄灰色砂質土層)に達するが、表土中より縄文時代中期~後期の遺物をみている。 (町田)



第6図 土層実測図②(½) - 11 --

(3) 遺物

古田遺跡の調査で得られた遺物は、縄文土器片約200点、石器50点、弥生土器20点、古墳時代以降の土器片約4,000点、鉄器3点であった。このほかに古墳時代の人骨1体と鉄器1点、自然遺物としてカキ殻を主体としたブロック状の貝殻類が得られた。この数字は範囲確認調査としての資料であり、包含層を確認した時点で埋め戻した区域もある。

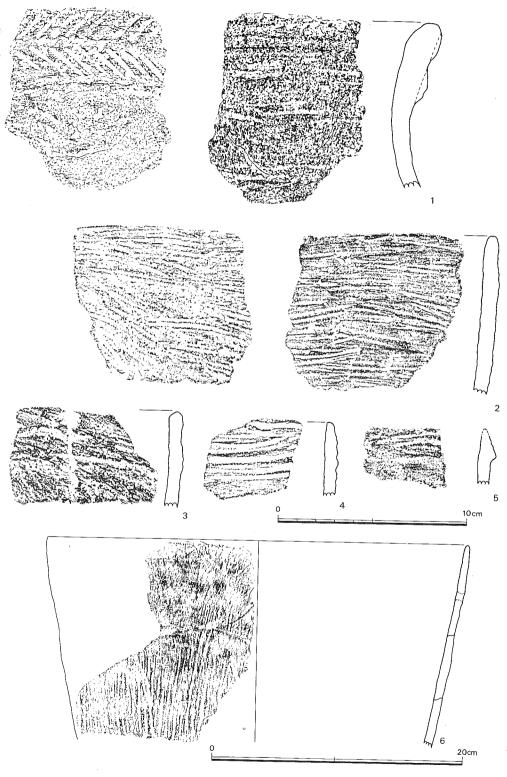
以下年代ごとに説明を加えて見たい。

1 縄文時代の土器(第7~10図)

縄文時代の遺物はD-18区から $B\cdot C-42$ 区まで出土を見たが、 $D-18\sim A-31$ 区まではほとんど縄文晩期の土器である。 $B\cdot C-42$ 区では中期から後期に至る資料が得られた。

図示出来なかったが、滑石粉末を多く混入した中期の土器がB・C-42区から出土した。底部と胴部分である。このグリッドは谷間の一番奥に位置し、南側の開口部の方が近い。包含層は砂と粘土の混じり合った所で非常に浅い層からである。入江が砂丘で陸化した最初の部分であり、中期がこの遺跡の創成期であろう。1はC-42区からの出土で中期の土器と混在して出土した。口縁が2重に肥厚した部分に、綾杉状の短沈線を施している。頸部はしまり胴は丸く張るものと思われる。器形は北久根山式になるもので、ブリッヂになる把手の部分も出土している。胎土には、若干の雲母や長石も含まれるが、貝殻粉末が多く混入されている。色調は内外とも暗褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

2~6 は条痕文を主体とした口縁部で晩期の土器群である。 2 は内外とも丁寧に浅い条痕が施され、口唇部はややおさえ気味にナデられている。外面は褐色、内面は暗褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。 3 は内外ともヘラ状の擦過条痕が施され、粗く調整されている。胎土は粗い石英粒が目立つ。色調は内外とも褐色で焼成は良好。 4 は外面に棒状施文具による粗い沈線様の条痕が施されている。内面はヘラナデの擦過痕が残る。胎土は精選され長石や石英の微粒が含まれ、焼成も良好で色調は茶褐色を呈する。 5 は口縁部であるが端部を欠失している。上端は肥厚し若干の「く」字を呈する。この肥厚した部分に粗い条痕が見られる。内面にも弱い条痕が見られるがはっきりしない。胎上には細かい雲母を含み焼成も良好である。色調は外面褐色、内面は暗褐色を呈する。 6 は一番大形の破片である。口縁に近い上端部は横にナデられ、それ以下の胴部は細い棒状の施文具でタテに1本1本指かれており、全体的には条痕様に見える。口唇部はやや尖り気味に丸くおさめられている。内面はヘラ状のものでヨコナデ調整されている。補修孔が1 個認められるが、この孔は焼成以前に穿たれていたと思われる。 7 は条痕の地文をヘラ状のものでナデ消している様であり、器表が荒れている。内面はヘラ状のものでヨコナデされて整っている。胎土には多くの結晶片岩粉末を混入しているため締まっている。一



第7図 縄文土器実測図①(½)

見中期の土器を感じさせる。8も同じように胎土に結晶片岩粉末を混入している。器表には弱い貝殻条痕が走る。口唇は薄く尖っている。7・8も焼成は良好で色調は赤褐色を呈する。9は口縁で器表は貝殻条痕が施されている。内面はナデが施され、胎土には貝殻粉末を混入しており、締まって焼成も良好である。

10~23は貝殻条痕文を主体とした胴部破片である。この中の10・15・17には結晶片岩の粉末が混入されている。これらの破片は全体的には胎土・焼成も良好で、器壁も薄手のものが多い。24は粗い条痕が見られるが、全体的に磨耗している。両側から穿たれた補修孔が1個認められる。25はこれまでの土器の胎土と違っており黒曜石の細片が含まれ、条痕が施された器表は荒れている。内面は炭化状のものが付着している。

26~33までは無文土器の口縁部である。ほとんどが深鉢形になるものであるが、28のように小形になるものもある。30もあまり大形にはならないが、滑石か結晶片岩の微粉末を含んでいる。また32や33は茶褐色の精選された土が使われており、器表が荒れたものもある。

34は口縁を欠失する頸部から胴部に至る部分である。器表には棒状の細い条痕が残る。内部は荒れて磨耗している。頸部が締まり胴が張っていることから壺形になると思われる。

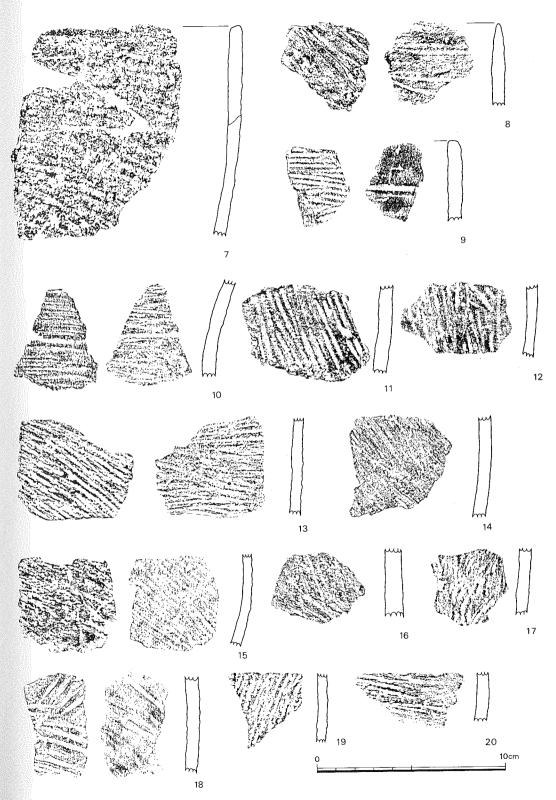
35は組織痕土器である。経系と緯系が整然としており間隔が密である。緯系の方は細部にわたって撚糸の方向まで観察出来る。外面は褐色であるが内面は黒色である。胎土・焼成は良好である。

底部 (第9図36~40)

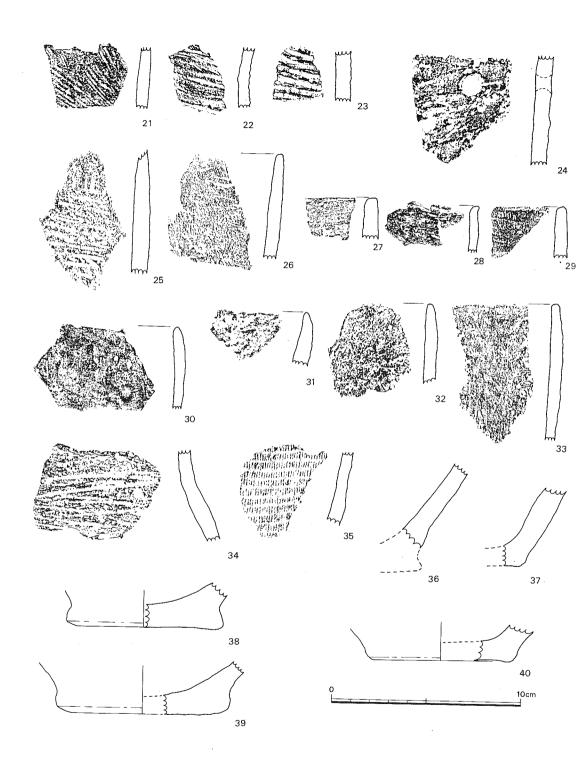
底部は5点が出土した。36は底の部分を欠失し、立ち上がりの部分だけである。外面は無文で凹凸が見られるが、内面はヘラにより磨かれている。胎土・焼成は良好。37は平底で、立ち上がり部分には指頭による整形の跡が見られる。胎土には長石や雲母を含み、焼成良好である。色調は内外とも茶褐色を呈する。38は平底で外に張り出し、立ち上がり部分がくびれている。胎土には貝殻粉末や白い砂粒を含み良好だが、焼成は甘くもろくなっている。復原口径8.2cmを計る。39は磨耗を受け全体的に丸くなっているが平底である。胎土・焼成とも良好。復原径9.2cmを計る。以上は鉢形土器の底部と思われるが、40は若干の上げ底となり、立ち上がりが外反しており、かなり胴部がふくらむと考えられ壺形を呈するであろう。胎土・焼成は良好で復原径7.8cmを計る。

精製土器 (第10図41~46)

粗製土器とセットで出土した精製土器は若干であるが、まとまりを見せる。41は口縁部が短く立ち上がり、やや外反して浅い1条の沈線がめぐる。頸部は尖り気味に突き出し、胴部へは強く屈曲して張り出す。胎土は精選されており、丁寧に研磨され黒色を呈するいわゆる黒色研磨の浅鉢である。42はほぼ平坦に外に開いた口縁部は、端部が尖り気味におさめられている。 頸部は締まり、胴部はゆるくふくらみながら浅鉢形を呈する。内外面とも暗褐色で全体がヘラ状



第8図 縄文土器実測図②(½)



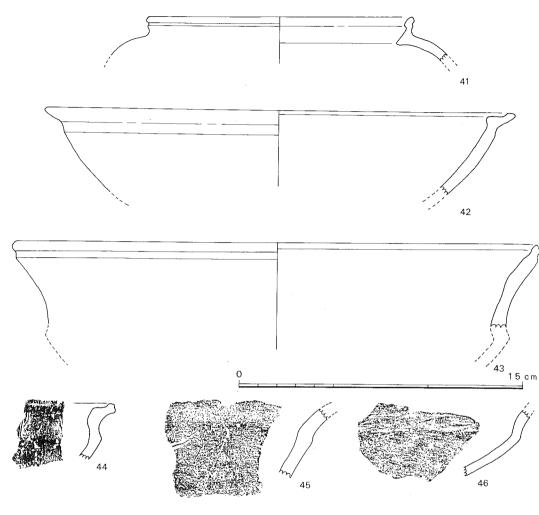
第9図 縄文土器実測図③(½)

のもので研磨されている。胎土には貝殻粉末が混入され焼成も良好。復原口径は25cmを計る。 43は大形の半精製の浅鉢形土器である。口縁部に1条の沈線が入り,頸部は直行しながら外反 しており,接合面で欠失している。胴部は「く」字形に屈曲するものと思われる。胎土には長 石や石英の微粒子を含み焼成も良好。色調は内外とも褐色を呈する。44は口縁が外反し1条の 沈線がめぐる。内側も玉縁状に区切られている。頸部は内湾して胴部は「く」字形に屈曲して いる。研磨は施されているものの,半精製土器である。45は半精製の土器で頸部から胴部へか けての破片である。頸部はあまり締まらず,胴部も張らない中鉢状を呈するようである。胎土・ 焼成は良好。46も頸部から胴部へかけての破片であるが胴部は屈曲して浅鉢を呈する。胎土に は貝殻の微粉末を混入している。表面はかなり磨耗を受けているが,内外とも黒色で研磨され た土器であったことが窺える。

今回の調査における縄文土器の構成は、数こそ少ないが、遺跡の規模からすると予想外の結果を得たと言える。縄文中期阿高式土器や北久根山式土器の出土は、若干ながらも、海岸線に位置する遺跡の特徴を表わしているといえよう。晩期の土器は条痕文土器を主体としており刻み目突帯の土器は見られない。この土器群に供伴する精製土器は、その特徴から黒川式を中心とするものであり晩期中葉ということが言えよう。

周辺における関連した遺跡をあげるならば、大悲観岩陰遺跡や、相浦川を 4 kmさかのぼった、標高約16mの地点に位置する下本山岩陰がある。昭和45年調査が行われ轟式や曽畑式土器と人骨が出土し、さらに中期阿高式や後期の鐘崎式土器などと一緒に石器や骨角器が出土している。具層も検出されており海に依存した様子が窺える。本遺跡との直接のかかわり合いをあげるならば、九十九島と呼ばれる島々の中でも一番大きな高島に所在する、宮の本遺跡があげられよう。高島は佐世保市に属し、古田遺跡からは 4 kmの南に位置している南北 3.5 km、東西 900 mの細長い島で、南端には標高 136 mの番岳がそびえる。遺跡はこの山の麓の砂丘に営まれているが海にはさまれた東西の地形はわずか200 m にすぎない。

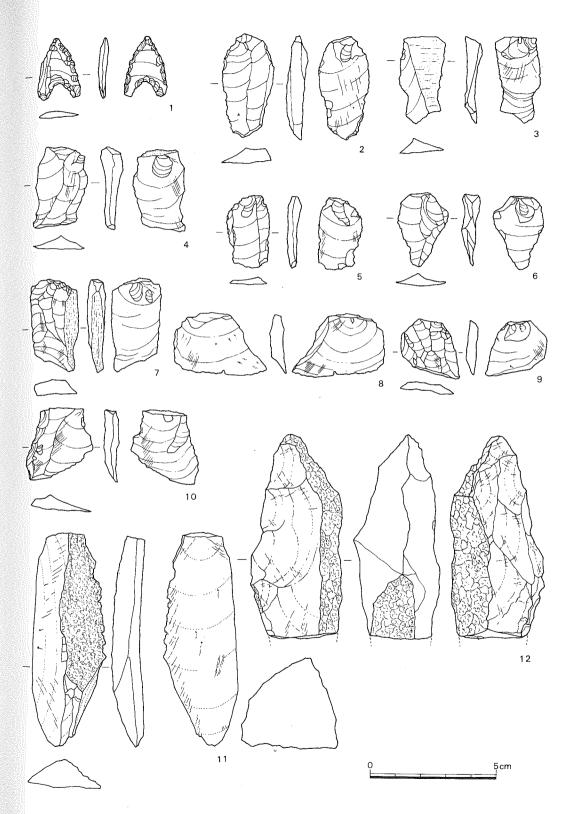
調査は昭和52~55年度にかけて実施され多くの成果が得られている。縄文時代の遺物は古くは曽畑式から阿高式、舟の元式がわずかに出土している。縄文時代の主体をなすものは晩期の土器である。ここでも貝殻条痕文土器や各種の条痕を主体にした土器に伴って精製土器が出土している。主体はやはり黒川式土器が占めるようである。ここではさらに組織痕土器や刻み目突帯文土器も出土しており晩期中葉から終末にかけての様相が見られる。この時期に伴う遺構は土城墓が検出されている。弥生土器も多くが出土している。ほとんどが中期中葉のものであるが、弥生の場合には良好な石棺墓を伴い人骨も遺存していた。特に石棺墓では字久松原遺跡や浜郷遺跡で見られたような板石積の石棺墓が検出され、南九州の地下式板石積古墳に類似した様相も見られた。以上は宮の本遺跡の概略であるが、古田遺跡の場合、縄文から弥生時代にかけては、前者の影響を強く受けていたと考えられる。 (安楽)



第10図 縄文土器実測図④ (½)

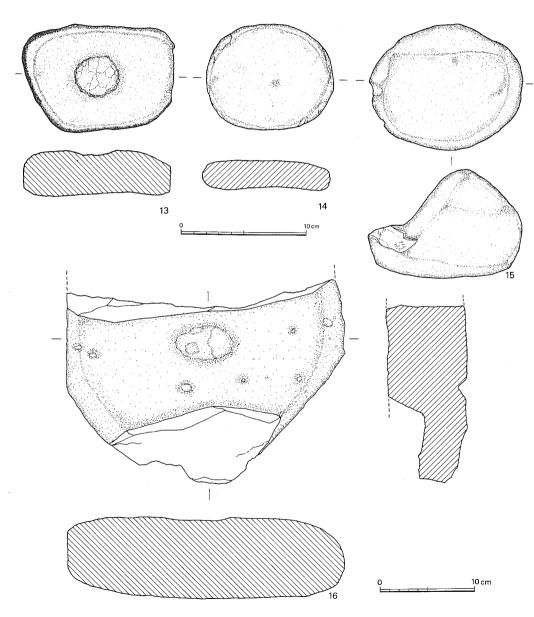
2 縄文時代の石器 (第11~12図)

出土石器の中で縄文時代に属するものを図示した。1は黒曜石製の剝片鏃である。片面は一回の打撃で剝離され、エッヂは両面から調整されている。先端部をわずかに欠き、長さ2.5 cmを計る。A-21グリッド晩期の層からの出土。2~10は黒曜石の剝片である。2~7の縦剝ぎのものと、8~10の横剝ぎのものがある。鈴桶遺跡などに見られる5 cm前後に集中する、いわゆる縦長剝片石器とは違い、形態的にも不定形である。黒曜石の材質は、中に白い不純物を含むものが多く、松浦地方に産するものであろう。11は断面三角形を呈した縦長剝片でサヌカイト製である。左面の半分は自然面を残し横剝ぎの加撃である。右面は平担面から一回の打撃で剝がれている。平坦面にも自然面が残され、全体的に使用痕は見られない。長さ8.5 cm、幅3 cm、



第11図 石器実測図① (%)

厚さ1.1 cmを測る。12はサヌカイト製で、断面三角形の尖頭状の石器である。下端部を欠失するが、三辺の一辺は自然面を有し、残り2面は荒い剝離が加えられ、完成された石器としては粗雑である。海岸に立地した遺跡として見るならば、石銛としての用途も考慮される。13は砂岩製の凹石であるが、両面とも磨石の用途も兼ね備えている。重さ650gを計る。14は扁平な砂岩を利用した磨石で両面を利用している。重量300gを計る。15は硬い頁岩質の不定形な磨石である。研磨の部分は光沢があり、わずかにふくらむ。重さ1.23kg。16は大形の砂岩質の石皿であるが両端を欠失している。中央は若干凹んでいる。



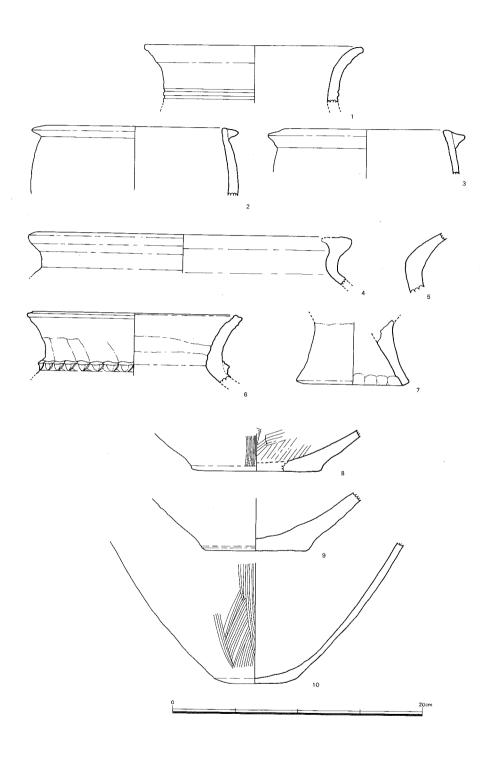
第12図 石器実測図② 凹石・磨石(½)・石皿(½)

3 弥生時代の土器 (第13図)

全体の割合から見ると、弥生式土器は少数にすぎず文化層もはっきりしていない。 1 は外反 する壺型土器の口縁で口唇部は丸くおさめられている。口縁のすぐ下は、わずかに高まりが見 られ頸部へ至る区切りが窺える。この高まりを中心にハケによるヨコナデが上から斜めにかけ て見られる。その下には浅い2本の沈線がめぐる。内面は口縁部分にハケによるヨコナデが施 されている。胎土には石英や長石それに若干の雲母を含み、胎土・焼成は良い。 2 は甕形土器 で断面三角形の貼り付け口縁を呈し、胴部には地文にハケ目調整を行い、そのあとタテにヘラ 状のもので磨かれている。色調は内外とも褐色を呈している。胎土には石英粒、長石を含み焼 成も良好である。復原口径16.4cmを計る。3は2と同じ断面三角形の口縁を有するが,2と較べる とやや下におちる。表面はやや磨耗を受けているが、ハケ目などは施されていない。色調は黄 褐色を呈し、胎土には石英粒や長石を含む。復原口径15.7cmを計る。以上の土器は中期前葉に位 置するものである。4は復原口径25.8cmを計る大形の甕口縁部であるが磨耗著しい。口唇の内 側は欠失しており特徴が見られないが鋤先状に近い形をしていたと思われ、中期中葉以降に位 置づけされる。胎土には粗い石英粒を多く含み器表は磨耗著しい。B−6Ⅲ層からの出土,5 は口縁部に近く、磨耗著しいが、よく締まった頸部にわずかなハケ目を認めることが出来る。 胎土には粗い石英粒を多く含む。この土器は壺に近い形である。 6 は口縁部で西北九州には異 質の土器である。外反して伸びた口縁の口唇部は内外からヨコナデされ、わずかに浅い沈線状 のものが認められる。頸部は締まりそこに断面方形の突帯が貼りつけられている。突帯には指 頭と思われるもので整形され、爪形状のものが斜めに施されている。口縁から頸部にかけては 指頭によるナデがあり,その下はヘラ状のもので調整されている。内面も指頭によるナデ調整 が見られる。色調は褐色で胎土は精選され焼成も良好である。復原口径17.2cmを計るこの種の 土器は,鹿児島県において弥生後期から古墳時代に比定されている成川式土器に類例が求めら れるのではないだろうか。7は底部か器台と考えられるが、粘土の接合部で割れているため確 証がない。色調は茶褐色で胎土は精選され緻密である。復原径は9㎝を計る。

底部

3点が出土した。8は壺の底部と思われるが、底は平坦でなく全体に丸みを帯びる。内外には粗いハケ目が浅く施されている。胎土には粗い石英粒を含み焼成は良好、色調は黄褐色を呈する。復原径10.4cmを計る。B8-24区からの出土。9は大形の平坦な壺底部である。粗い石英粒を多く含み焼成は良い。色調は外面がやや赤みを帯びた褐色、内面は黄褐色である。復原径は8.5cmを計る。10は甕底部である。器壁は薄く、表面には全体にハケ目が施されている。胴部は張り出しているが、それ以上の器形は不明である。しかし底部が全体的に丸みを帯びていることから、後期あたりに考えられる。復原径は6cmを計る。色調は内外面とも赤褐色を呈している。



第13図 弥生土器実測図(½)

4 古墳時代の土器・鉄器(第14~23図)

大きくわけて、土師器と須恵器がある。その他に軟質土器(2点)、鉄器、土錘、石錘等を検出している。出土点数は約4,000点、内、須恵器91点、土師器3,900点、鉄器 3点、土錘 4点、有孔石錘1点をみている。地区別にみていくと、B-6、B-8、X-6区におよそ3,500点の出土をみており、生活空間がかなり小さな範囲にしぼられているとみられる。調査区内においての時期は、B-8区が古式土師器段階の出土遺物が多く、次にX-6、B-6区がおおまかな傾向としてとらえられる。須恵器の出土量としては、B-6区が(35点)で一番多く、次いでB-3区(29点)この 2 地区で全体の約70%を占めている。また、B-3区の出土の須恵器は8世紀代を中心とするものがこのほとんどである。以上が、出土遺物に関する概略的なところである。以下、順を追って説明を加えていきたい。

土師器 (第14図1~25)

時期としては、布留式土器の特徴をそなえた土師器が、B-8区を中心に出土をみている。 口縁部直上に沈線をみて、頸部から口縁部にかけ内湾し、器壁がかなり薄いものが多くみられ ることが特徴的である。

1は一見弥生土器の様な型態をそなえるが、口縁直上に沈線をみるものである。内外面ともにハケ目の調整が残るものである。2は、畿内地方でいわれている布留式土器で、口縁部が波をうった状態を呈し、口縁部内面に厚みを持ち、かえり状を有す。3は内外面ナデ整形をみ、口縁部をつまみあげた状態をみる。4~17は、いずれも口縁部に沈線、あるいは浅い凹みをみ、口縁部が内湾するものである。18は、口縁部を内外面からつまみあげたようにし、口縁部直上を丸くなすものである。19、20はやや器壁が厚くなり、口縁部が外反しているものである。21は大きく外反するもので、淡黄白色を呈し、胎土が古田遺跡でみるものと異なるものである。24は口縁部が嘴状になり、内區をつまみあげた状態にしている。25は頸部からの立ちあがり外反するが、口縁部付近で内湾し、口縁部をつまみあげた状態にもっていくものである。22は甕形土器で、口縁部がほぼ直線的にのび、口縁直上に浅い凹みをみる。23は、二重口縁の土器で、口縁部がやや短いものである。

土師器 (第15図1~11)

口縁部内湾する二重口縁の変形をみるもの、口縁部が直線的になり頸部がしまるものをこれ にあてた。

 $1\sim4$, 甕形土器で1は口縁部が内湾するもので、内面頸部から肩部にかけヘラケズリをみる。2, 3は、口縁部が内面外反し、外面微妙なふくらみをみる。 口縁の短いものである。4は二重口縁がくずれた形状を呈し、頸部からの立ちあがりが内湾し、口縁端部で外反し、丸く尖らせる。 $5\sim9$, 壺形土器で、5は4と同様口縁部が微妙に変化する。頸部がしまる。6頸部が締まり、頸部からの立ちあがりが、外反ぎみに口縁付近で内湾するものである。 $7\cdot8$

は器壁の厚みが同じくらいに、頸部から口縁部にかけやや立ちぎみに外反する。また8には浅い沈線をみる。9、内面暗文風のヘラケズリを行い、磨きをかけている。頸部から肩部にかけては、ヘラケズリをみている。外面風化して整形状況がはっきりしない。10、11は小片であり、径を求められない。共に、甕とみられるものである。

土師器 (第16図1~14)

頸部にしまりがなくなり、口縁部が外反したものをこれにあてた。

 $1\sim5$, 7 は布留式土器以後に後続するものとみられるものである。 1, 3, 4, 7 は甕形土器になるとみられるものである。 2 は頸部から外反するもので,口縁部付近でやや内湾ぎみである。 5 は頸部から口縁部がほぼまっすぐに立ち,口縁部付近で,やや外反する。壺とみられる。 $9\sim11$ はほぼ同時期の産物とみられる。壺とみられるものである。頸部から大きく外反していくものである。 $12\sim14$ は $7\sim8$ 世紀頃の土師器とみられるもので, $12\cdot13$ 頸部が口縁近くの高い位置にきて,ゆるやかに肩部へ移行していく形態をみるものである。14 は口縁部が立った状態で胴部へ移行していくものとみられる。

土師器 (第17図1~17)

高坏、および脚部、製塩土器をこれにあてた。

1 は須恵器を模倣した土師器で、脚が付されるものとみられる。 $2 \sim 7$ は、高坏の坏の部分とみられるもので、2 は脚近くまで丸みを帯び、口縁部付近から外反するものとみられる。3 には明瞭な稜が肩に付されている。4 は口縁部、丸みを持ち、ほぼ直線的に外反する。 $5 \sim 7$ は、坏と脚の接合部である。 $8 \sim 12$ は、脚にあたる部分のもので、 $8 \sim 10$ がほぼ中央部付近でふくらみをもたせている。 $11 \cdot 12$ は小形の脚で、放物線をえがく形状を呈する。 $13 \cdot 14$ は高坏の脚になる部分とみられ、13 はほぼ平坦なすそ部をなし、急激な立ちあがりをみる。 $15 \sim 17$ は製塩土器の一部とみられるもので、15 にはタタキをみており、また16 にもタタキを施した状態がわずかにみられる。

土師器 (第18図1~15)

坏類を見るものである。全体にB-6区出土のものが多くを占めている。坏類には口縁部が外反するもの、内湾するもの、直立するものとがみられた。

口縁部外反するものには、 $1 \sim 3 \cdot 11$ があり、1は口縁部に浅い沈線をみ、2は口縁端をまるく尖らせおさめるもの、3は口縁部が微妙に変化し、外反する。口縁部内湾するものには、 $4 \sim 10, 12, 13$ がある。4 は口縁部直上に沈線をみて、口縁端をつまみあげたような形状をみる。5 は、大きく内湾するものである。 $6 \cdot 7$ は3 の外反するものと口縁部の作りを同じようにみるが、外へださずに内側へおりまげるような状態をみるものである。口縁部が直立するものに $14 \cdot 15$ がみられる。14は口縁部を直上から内面へ切ったような形状をみ、15は口縁端に丸みをもたせる。

土師器 (第19図1~15)

小型の壺類としたものである。

1~3は口縁部が胴部より狭いもので、いずれも口縁部内湾した形状をみる。4は底部が丸底をなさずへこみを持ち、二重口縁をなし、ほぼ直立した口縁部をもつものである。5~8・10・11は胴部より口縁が広くなるもので、5は口縁部二重口縁をなすものである。9も二重口縁の変形した状態をみるもので、外面ナデをみるが内面ナデをみない。12は頸部から立ちぎみに口縁部へ向い、口縁部で外反する。胴部が長くなる。13は手揑土器で、底部を平底になす。口縁部を欠損する。14、底部が尖りぎみをみている。内外面、ミガキをみる。15は平底に近い丸底をみるもので、外面へラミガキを行い、内面底部までヘラケズリをみる。

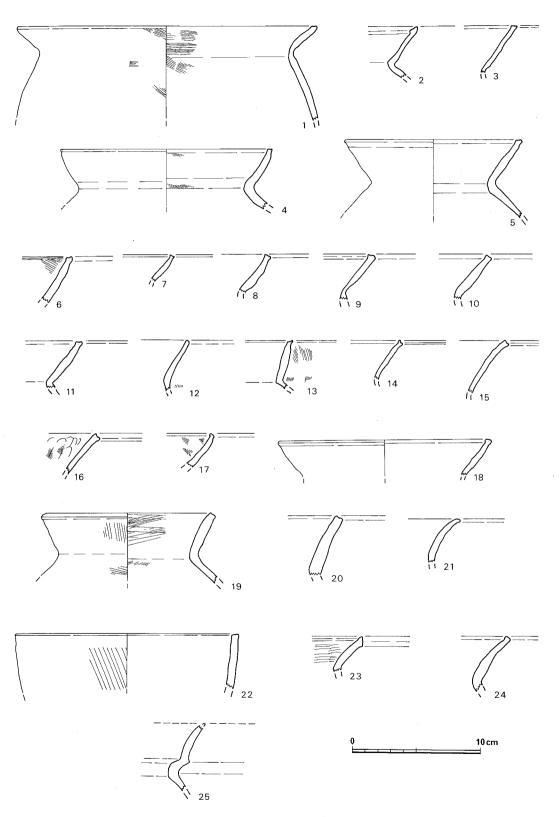
土師器, 瓦質土器, 石錘, 鉄器, 土錘 (第20図1~14)

 $1 \sim 3$ は甕の底部で、1 はやや尖りぎみになり、2 は底部がやや平たい丸底である。3 はやや立ちあがりの傾斜が急である。4 は坏形土器ではりつけ高台をもつ。5 は瓦質ぎみの土器で焼成があまい盤形土器である。6 は瓦質の盤形土器とみられる。

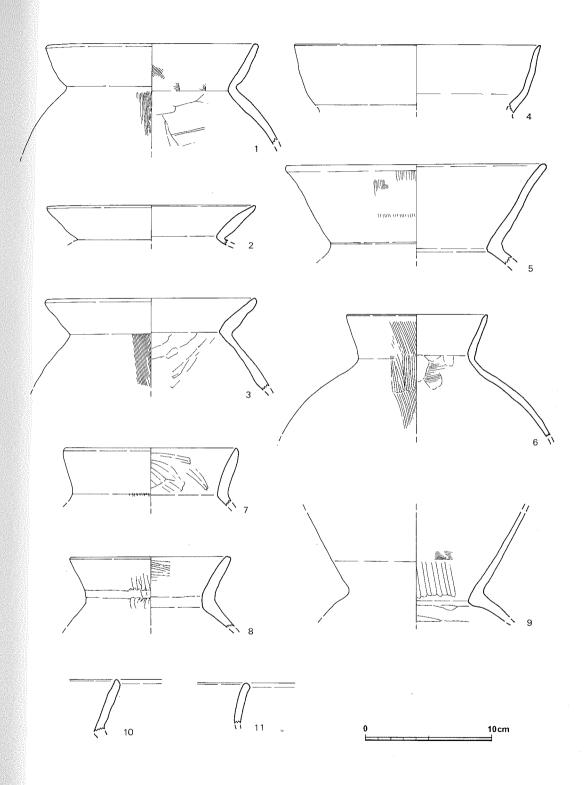
有孔石製品, 鉄製品, 土錘 (第20図7~14)

7 は頁岩質の材質を用いて,正面上部に 5 mmほどの穿孔を計る。全面にケズリこんだ様な磨きをみている。長さ 6.2 cm,幅 3.0 cm,厚さ 2.2 cm,重量61.5 gをみる (B 3 - S1)。8 は板状の鉄器である。正面左側面で1.5 cmを計る。 錆による腐食が進む。不明製品である。長さ 8.7 cm,幅3.65cm,厚さ 1.7 cmを計る。 9,E・F-23区人骨の副葬品刀子である。ほぼ完全な形で残るが腐食がはげしく,関の部分が明確でない。全長15.5cm,幅2.1 cm,厚さ 0.35cm。10,鎌状鉄器とみられ,下部を折り曲げ正面左側面の刃が薄く,右側面部厚みを持たせる。長さ19.5cm,幅 2.4 cm,厚さ 0.25 cmを計る。 11~14 は土錘で,いずれも砲弾形を呈するものである。11,A-31区2層,やや幅が狭くなり,長さ 2.9 cm,幅 1.6 cm,径 0.85cm,重量 6.2 g。12,表土層,長さ 3.1 cm,幅1.85cm,径 0.55cm,重量 7.4 g。13,K-5 層,長さ 2.8 cm,幅1.81cm,径 0.55 cm,重量 8.7 g。14,B-6 区表採,長さ 3.0,幅1.78cm,径 0.65cm,重量 6.4 gをそれぞれ計る。須恵器 (第21図 1~17)

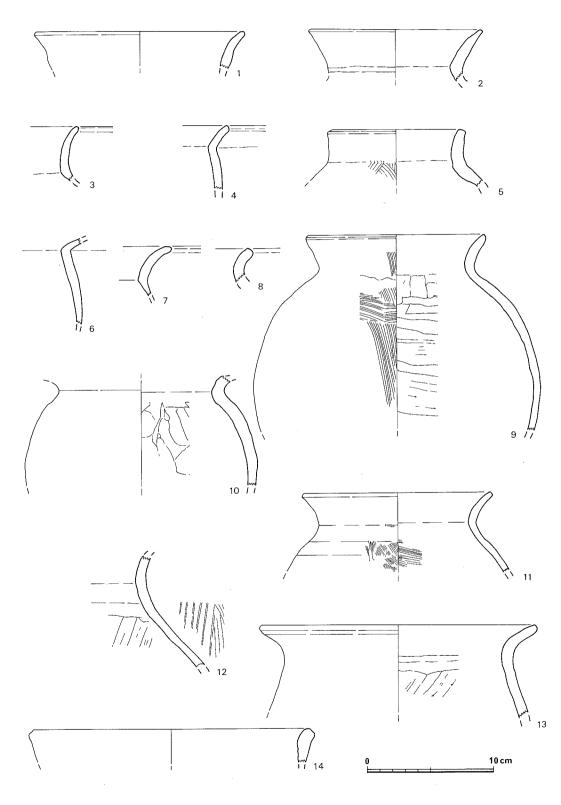
1~6 は蓋坏である。1 は稜は小さいがシャープな整形である。朝鮮系の須恵器であろうか。2 は蓋にみられていた稜の痕跡が全く姿を消すものである。3 は蓋の内面にかえりを持つもので、またかえりが口縁端部より下方にのびるものである。4~6 は、天井部中央につまみをもつ、擬宝珠様つまみを有する蓋類である。7~12は坏身で、7、8 が高台をつけないで受け部をもつものである。9~12は高台とハリ付けを見る坏身となるものである。13、14は高坏の類で13は小片で脚径を測りえないが、脚端部を丸くおさめるものである。14は盤状の坏に脚をはりつけたものである。15は胴部から口縁部へ内湾し、口縁部丸みをもって終わらせる。16は壺形土器で内面同心円の板具を用いて、かざねのタタキを行い、青海波文となる。外面格子目のタタキをみるが、肩部付近をナデによって格子目文様が消えかかる。マキアゲ、ミズヒキの整形をみるものである。17、口縁部片であるが、口縁部外湾させ口縁部先端をおりまげたよう



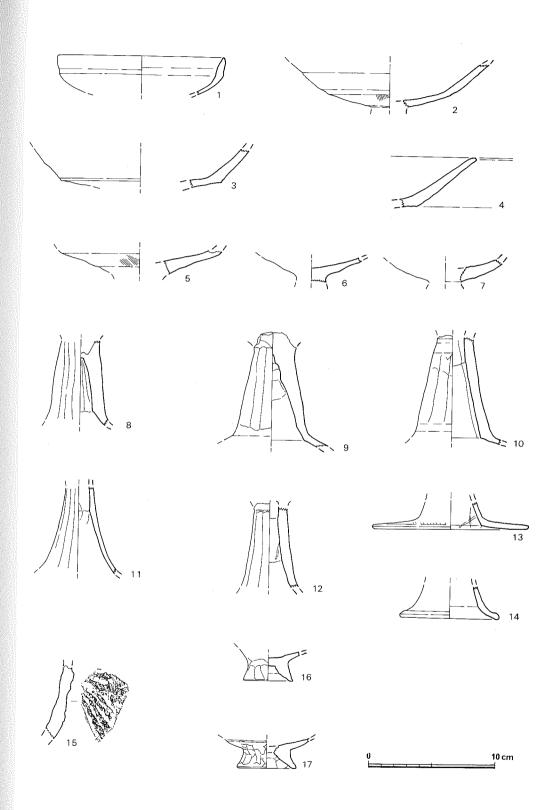
第14図 土師器実測図① (½)



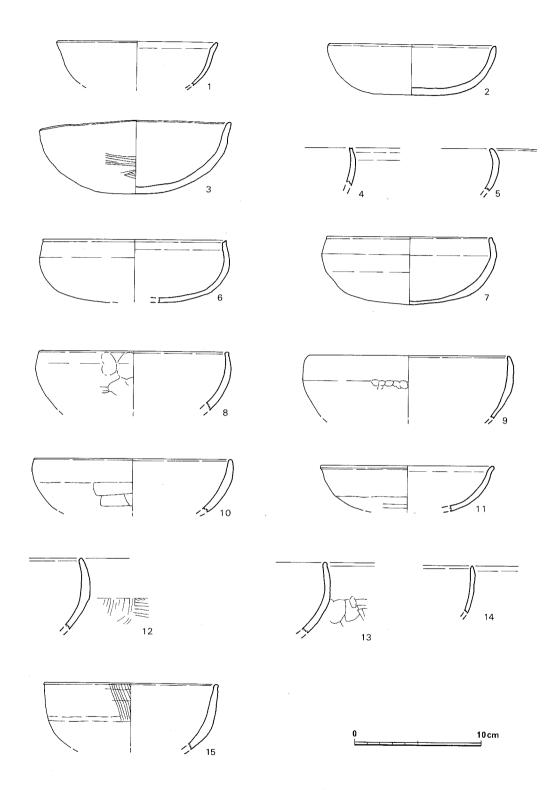
第15図 土師器実測図② (⅓)



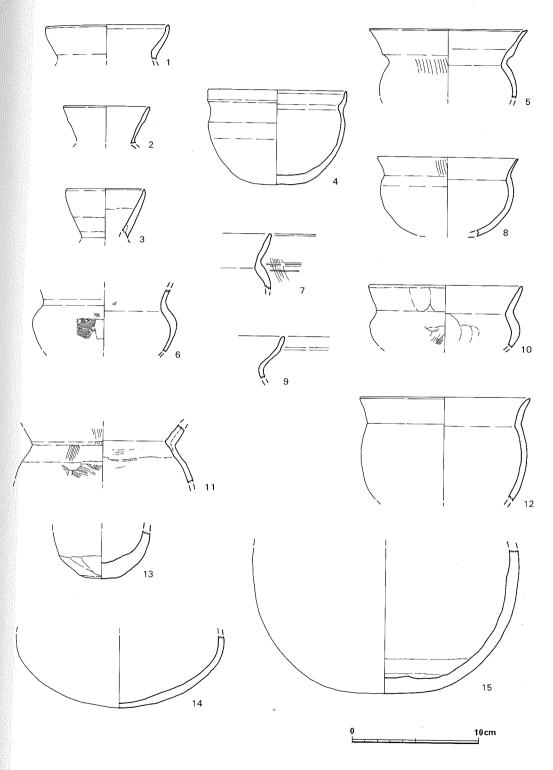
第16図 土師器実測図③ (⅓)



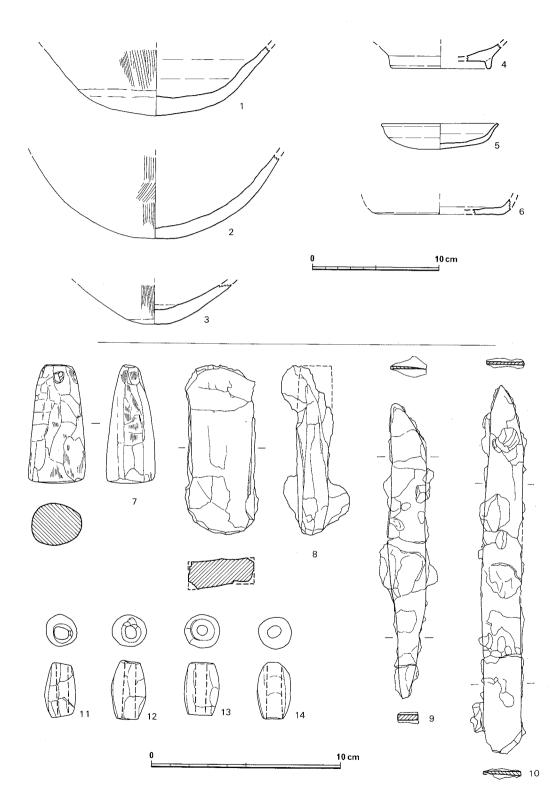
第17図 土師器実測図④ (⅓)



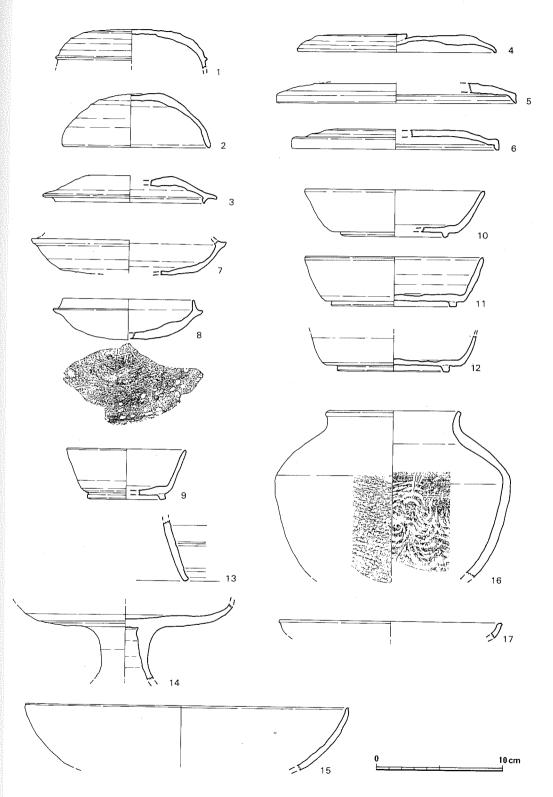
第18図 土師器実測図⑤ (⅓)



第19図 土師器実測図⑥ (⅓)



第20図 土師器実測図⑦ (½), 石錘・鉄器・土錘実測図 (½)

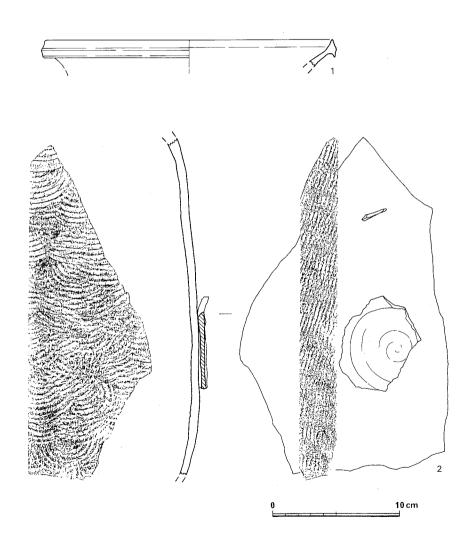


第21図 須恵器実測図① (⅓)

にまるく形成する。

須恵器 (第22図1~2)

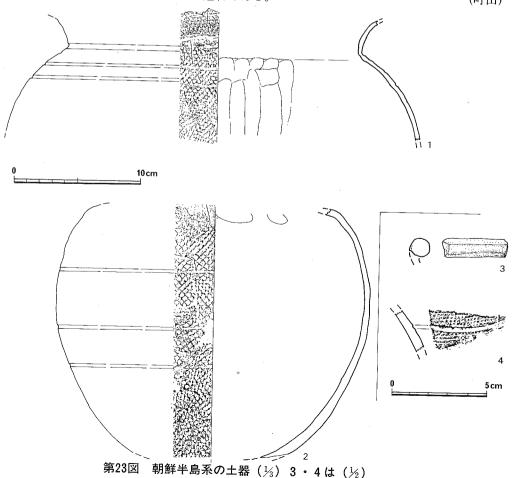
1, 口縁端部が上下につきだす形状を呈し、その上下の中央部がややふくれた状態をみる甕とみられる。また内面には自然釉の付着があり、淡黄褐色と灰色のまだら文様をみる。2、甕の胴部片で、外面に平行条線叩文のタタキを行い、その上を数段のカキ目調整を行う。内面、同心円の板具によって青海波文のタタキをみる。内外面灰色を呈し、断面も灰色を呈する。中央部と上部に他の須恵器が焼成時に接合した状態をみる。また下部は、焼成時の熱を受けただれた状態を呈し、一部自然釉かかり暗緑色を呈する。



第22図 須恵器実測図②(⅓)

朝鮮半島系土器 (第23図1~4)

1はB-6区より出土の軟質土器である(P-36)。外面全面に格子のタタキをみる。頸部と肩部の間に3本の沈線がタタキの上をなでるようにめぐらすものである。頸部から口縁部にかけては、ナデ整形のためタタキの文様がかすれた状態を呈する。内面口縁部ナデを行い、頸部から以下は指による縦ナデを行う。色調は内外面煤ミガキをかけたように黒色を呈し、断面中心部が黒色でそのまわりが赤褐色を呈する。胎土は緻密な粘土を使用し、焼成がややあまい。2もB-6区出土の軟質の壺で(P-17)、内外面暗赤褐色を呈し肩部から底部付近まで格子のタタキを施す。その後体部に三本の浅い沈線を引く。また肩部から口縁部へ向けてはナデ整形し、格子のタタキを消却する。内面は指による整形痕を頸部付近にみて、それ以下を指によって縦方向にナデたものであろうか。擦痕状のものがみられる。丸底の底部をなすと考えられる。3は無文土器とみられるもので、焼成あまい。断面円形状を呈し、口縁部に紐状にハリツケを行った部分の残片であろう。4、格子目状に細い線描きを縦方向から行い、次に横方向から行う。また、この擬格子目をわかつように太い沈線が一本引かれるのを見ており、上記の1、2を模倣して作られたものではなかろうかとみられる。胎土、やや荒い。焼成あまく、黄褐色を内外面呈する。以上が本遺跡における主な遺物である。



まとめ

ここでは、B-3-A-13区に出土した遺物を中心に土層、出土地区を優先させながら土器の特徴をあげて、その編年観をとらえていきたい。

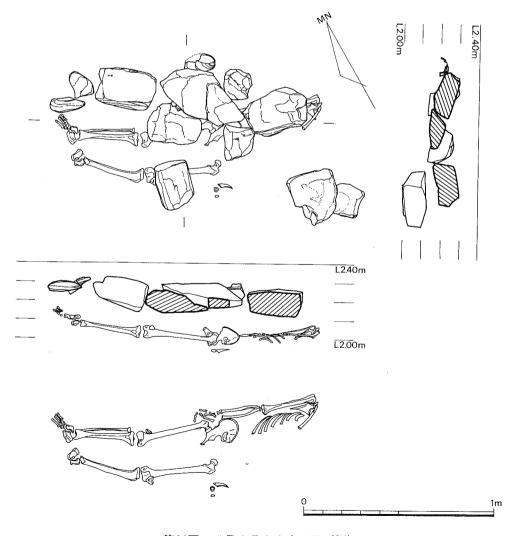
第14図にあげた甕形土器資料が古式土師器として取り扱った資料である。この時期の特色と して、口縁部が内湾し、口縁部直上を指によるナデ、ツマミによって口縁部を一周させ沈線状 の凹みを作りだす。また器壁を薄くすることもこの土器の特色である。この土器に後続するも のとして第15図1~3をあげた甕がある。この時期になると口縁部に沈線の凹みをみなくなり 器壁に厚みが増し内湾から外反へと移行する形態をもつようになる。それとはまた別に二重口 縁から形態変化をとげたとみられる4のような立ちあがりが内湾し、口縁近くで外反する甕が 前出土土器と平行かあるいは先行してみられる。第16図2,3,4,5がやや古そうで,5世紀 頃に来るものである。1、6は6世紀頃に位置し、9、10、11は大きく外湾する形状をみるよ うになるものである。第17図高坏の破損品であるが、2~4は布留式に平行するものとみられ るが、5~7はやや後続するものであろう。15~17は製塩土器とみられるもので、本遺跡にお いては、3点の出土をみている。第18図は坏類で、2はA-13区より出土をみており、4世紀 頃と考えられる。4、5がそれに続いてみるものと思われる。3、7がほぼ同時期の5世紀初 頭頃と考えられる。第19図は小形の壺類としたものであるが、1が布留式にともなうものとみ られ、4は小形の鉢になるものであろうか、口縁部が二重口縁をなす。5は口縁部直上に浅い 沈線をみて、二重口縁状をなしており、布留式土器と二重口縁とを重複させた器形をみている。 いずれも4世紀後半~5世紀初頭にかけてのものであろう。第20図の5,6は中世の遺物とみ られる。第21図は須恵器をみるものである。1が6世紀頃とみられる。2は6世紀後半~7世 紀前半頃であろう。3~15はいずれも7世紀頃~8世紀中頃にかけてのものとみられる。第22 図は須恵器の甕とみられ、共に7世紀頃のものとみられる。第23図1、2は、北部九州出土に おける比較から5世紀初頭頃とみられるものである。3は、無文土器で弥生時代の所産であろ う。以上の資料を概略編年図にしておいたので、参考にされたい。 (町田)

参考文献

- 1 中村浩一他『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯—本文編—大阪府教育委員会 1978
- 2 柳田康雄他『三雲遺跡Ⅳ』糸島郡前原町大字三雲所在遺跡群の調査 福岡県文化財調査報告書 65集 1983
- 3 武末純一「土師器」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ーXIXー』福岡県八女市室岡所 在遺跡群の調査 福岡県教育委員会 1977
- 4 宮崎貴夫「Ⅳ大堂遺跡」一大村市皆同郷大堂所在— 長崎県文化財調査報告書第45集 『長崎県埋蔵文化財調査集報II』長崎県教育委員会 1979
- 5 小池史哲「第3節B・B北地区出土の溝状遺構と遺物」一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵 文化財調査報告第1集『塚堂遺跡I』福岡県浮羽郡吉井町所在遺跡の調査 福岡県教育委員会 1983
 - 6 高野晋司他『串島遺跡』長崎県文化財調査報告書第51集 電源開発株式会社 長崎県教育委員会 1980
- 7 藤田和裕「無文土器」『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第37集 長崎県教育委員会 1978

(4) 古墳時代の遺溝

E・F-2・3 区で古墳時代の埋葬と考えられる人骨が出土をみている。(第24図) 埋葬状況は、現地表面より約1.2 m掘り下げた所で人骨の出土をみて、仰臥伸展葬であった。20~30cm程の砂岩および安山岩の礫を人骨の上に蓋がわりにのせて用いたものとみられ、頭部を東に向け、主軸方位N118°Eを測る。東側頭蓋骨及び左側上肢体、椎骨、左側寛骨を、イモガマ掘りの際、削りとられ50cmほどはなれた位置に再埋葬されていたが、撹乱をまぬがれた部分はきわめて正常な位置にあり、埋葬時の状態をそのまま残すものと判断される。また、撹乱を受けていた頭蓋骨その他のものも、同一個体と考えられる。副葬品として、左側大腿骨付近に「刀子」と、大形のアワビを右側大腿骨近くにみることができた。



第24回 1号人骨出土実測図(%)

埋葬遺構の他に $B-3\sim B-8$ 区の間で、 焼土、Pit、 貝層をみており第25図~第26図に遺物出土状況と合わせて、遺構配置を記載させている。

B-3区において、Pit、焼土、貝層の検出をみているが、黒色砂層(3層)からとみられる。Pit をみたが明確な掘り込み面をとらえられず5層上面に検出した。Pit は3~4 cm程で5層の混貝砂層にあたり、柱穴の可能性をみるにとどまった。また平面図および土層東壁断面において、インレタを付して図示する部分に焼土を検出しているが、遺物の出土をみていない。この焼土上面において貝層(3b層)の形成をみており、遺物との関係から推定すると8世紀頃に貝層の形成をみていると判断された。また、グリッド南北中央部より西側部分において、角礫の集石を見る。遺物も数点出土をみているが、生活遺構とどのような関連があるか、明確に判断を知ることが出来なかった。なおこの集石部分は小さい点で示している。

B-6区では,P-17の破線で示した部分とP-36に朝鮮系の土器とみられる軟質土器の一括資料をみており,大陸文化との接触が,本遺跡においてもとらえられたことは,5世紀頃の大陸文化の伝播経路に問題をなげかけるものと考えられる。またこの地区では,生活の一端をのぞかせる鉄鎌の出土もみており,生活状況空間を求める手がかりを残していると考えられた。

X-6区この地区は,B-6,B-8区についで遺物の出土 (929点)をみるものの,3層に角礫が散在しており,遺構の検出をみることがなかった。しかしここでは,製塩土器とみられる底部が2点と,タタキ整形をおこなった土器が1点出土をみている。

B-8区は、5層上面に、平面図において記載したようなグリッド北西隅から南東隅において、色調の変化をみており線引きをおこなっている。この線引きした南西部分にPit および焼土の検出をみており、生活遺構に関連したものとして、とらえられるところであるが、砂地の堆積層であり詳細な調査が困難なことに加えて、土層色調の判別がむずかしく、住居遺構と明確に判断するまでにはいたらずに掘り下げを中止して、埋めもどしをおこなった。

また $A-13\sim B\cdot C-42$ 区の間では、遺構の検出を見ることはなかったものの、D-21区まで 3 層の黒色砂層がみとめられるところからすれば、この地区までは確実な生活址が、残されている可能性を持たせているものである。

以上が古田遺跡における遺構検出状況であった。この調査区を自然地形下においてみた場合に、海岸部近くが埋葬区にあてられていて、それからやや奥まって開けた部分即ちB-6、B-8、X-6区を中心に貝層、および焼土、Pit、遺物等の生活遺構区を形づくる様相を呈し、それより南側地区のせばまった部分へいくと遺物の出土が急激に減少することをみることができるものであった。
(町田)

(5) 古墳時代の遺物分布状況

土層図でもふれたように $B-1\sim D-21$ 区まで南北に 3 層の黒色砂層が約70 mにわたって堆積をみている。この地区の中でもっとも土師器,須恵器の出土をみたのがB-6,B-8,X-6区である。これと比較できる地区がA-13,B-3区の 2 τ 所があげられる。A-13区では,弥生土器と混じって,土師式土器の甕,坏の出土をみており,本調査区における土師器のもっとも古い段階としてあげられるものとみられる。またB-3区における須恵器出土品は,現調査地区でのもっとも新しい遺物と判断されるところである。

さて各グリッド別に遺物出土状況をみていくと海岸に近いB-1, B-2, $E\cdot F-2$, 3地区出土の 3 層遺物はローリングを受け、丸みを帯びてその形状を知り得ない小片がほとんどを占めるものであった。ただ例外的に人骨が頭部を撹乱されてはいたものの、埋葬時のままに出土したことであった。 $E\cdot F-2\cdot 3$ 区において須恵器の坏身の出土をみているが、これもかなり磨耗している。

B-3~8区での遺物状況 (第25図, 第26図)

B-3区では、8世紀代の須恵器を多く出土しており、貝層 (3 b 層) の形成をみたのはこの時代頃からのものとみられる。

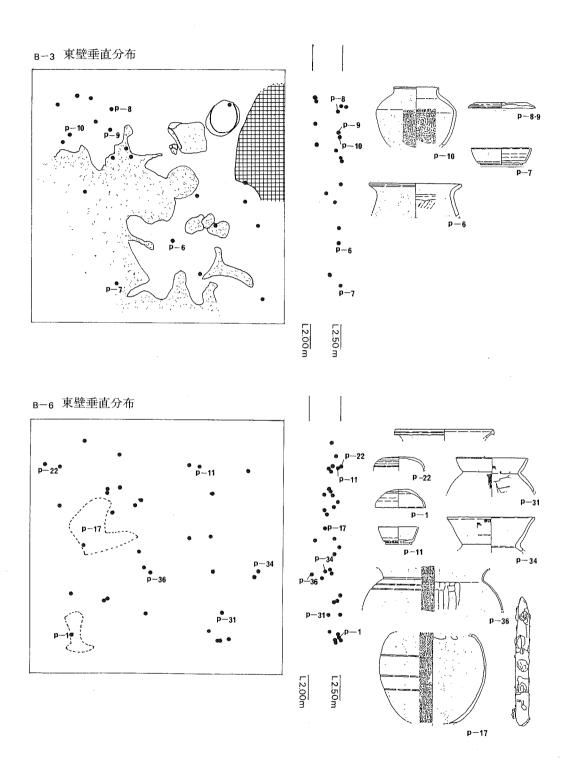
B-6区では,B-3区から最大で約14m南へ離れたところであるが,遺物の出土状況をみると,朝鮮系の土器(軟質土器)の一括資料の出土をみている地区である。またその他に,須恵器,土師器,鉄器の出土をみており4世紀後半~7世紀頃にかけての出土遺物をみている。

X-6 区では,B-6 区から最大で約 $12\,\mathrm{m}$ 西へ離れたところで,塩製土器底部とみられるもの, 土師器,須恵器片の出土をみている。布留式土器頃の遺物を中心に出土をみている。

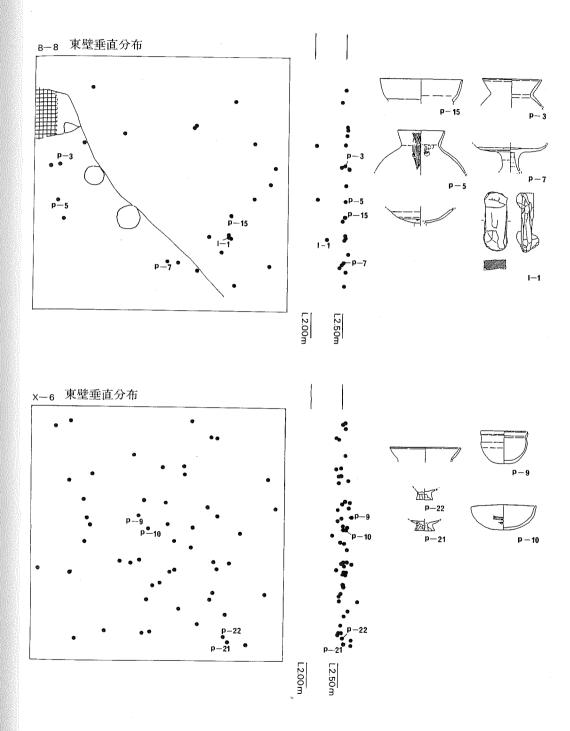
B-8区では,布留式土器を中心に8世紀頃までの須恵器の出土をみるものであるが、最下層より弥生時代の土器底部とみられるものが出土をみている。

A-13区は須恵器の出土をまったくみなくなり、出土点数もIII層で 145 点と土師式土器出土が極端に減る現象をとらえることができた。またこの層からは弥生後期におけるレンズ状の底部の出土をみている。

その他 D-18-26区までにも数点の出土をみているが、形状を計ることのできるものがみられず、本遺跡における古墳時代の生活様相は、A-13地区から B-8 、B-6 、X-6 区へ中心が移り、B-3 地区周辺において須恵器の終焉をみる様相とみられる。 (町田)



第25図 遺物分布状況図①(‰)



第26図 遺物分布状況図②(‰)

表1 土師器①

遺物	図 版	出土区	特	法	量(cm)	備	考
番号	番号	рите		口径	器高	VEI	
第14図 1	18	A13-4層	5点接合。口練直上に沈線をみる。口縁部外反し、すこし縁部が内湾する。外面口練部から胴部までハケ目をみる。内面細い横方向のハケ目をつけ頸部から肩部にかけても斜め方向に細いハケ目をつける。	(24.0)			
2	11	B6-3層	口縁波をうつ。内面に厚みを持つ帯状の粘土をめぐらし段を持つ。ローリングを受け摩耗する。色調内外面資褐色を呈する。胎上良。焼成ややあまい。	_	_		
3	"	X 6 P - 50	2点接合。内外面黄褐色を呈する。断面黒褐色,口縁直 上に浅い沈線をみる。内外面ともにナデ整形を行う。	_	_		
4	11	B8-3層 13	口縁部大きく内湾し、口縁直上に浅い沈線をみる。内面、明黄褐色を 星し、外面暗黄褐色を呈する。胎土緻密な粘上使用。焼成良。	(17.0)	_		
5	11	B 8 P - 3	内外面赤褐色を呈し、外面粗い緩のハケ目を施し、うすくナデ消しが 横に一線入る。口縁直上に浅い沈線が入り、やや内湾する。白雲母が 胎士に混入。	(14.2)	_		
6	"	B8-3層	内外面赤褐色を呈し胎土やや荒い,焼成ややあまい。口縁部直上に明確な段を持ち内外縁丸みを持つ。内面ハケ日整形、外面ナデ整形行う。	_	_		
7	"	B6-3層	内面黄褐色,外面暗赤褐色を呈する。口縁部内面,引っ掛かりを持つ。 口縁直上平坦に作る。外面口縁ふちも、やや飛び出し丸みを持つ。	_			
8	,,	B8-3層	内面暗黄褐色を呈し、外面赤褐色を呈する。口縁部内湾 する。内面細いハケ目整形、外面ナデ整形を行う。	_	_		
9	,,	A X 6-3層	内外面黄褐色を呈する。内縁直上に沈線をみる。 口縁部内湾する。	.matra			
10	"	B8-3層	内外面赤褐色を呈し、口縁直上に浅い沈線をみる。胎土よく精練される。やや内湾ぎみの口縁を呈し、焼成ややあまい。	_	_		
11	"	B8-3層	内外面赤褐色を呈する。外面ミズビキをし,内面細いハ ケ目をみる。内湾する口縁部を持つ。	_			
12	,,	B8-3層	4点接合。外面黄褐色を呈し、内面赤褐色を呈する。口緑直上に浅い 沈線をみる。口緑やや内湾する。	_	_	1	
13	"	B8-3層	外面細いハケ目を口縁部から頸部に施し頸部下にかなり細いハケ目を 見る。内面ナデ, 黄褐色を呈し外面暗黄褐色を呈する。焼成良, 胎土良。	_	-		
14	11	X6-3層	口縁部直上に沈線をみる。内面がやや反りぎみで、口縁 へ続く。内外面ナデ行う。内外面黄褐色を呈する。	_	_		
15	"	B 6 P - 32	内外面黄褐色を呈し、断面黒色を呈する。口縁直上に沈 線を持ち、器形は外反する形態になる。焼成良。	_			
16	"	X6-3層	口縁部直上に浅い沈線をみる。内面指により押え細いナデ整形をみる。 外面ナデ整形をみる。内外面赤褐色を呈し、口縁部やや外へ反る。		_		
17	"	B8-3層	内外面黄褐色を呈し、口縁部湾曲し、口縁部端にひっかかりを持つ、 外面二重口縁のくずれたような波をうつ。胎主良。焼成良。	_	_		
18	11	X6-3層	口縁部が内湾し、口縁端内外面に引っ掛かりをみて、口 縁直上やや丸みを持つ。	(16.8)			
19	19	X 6 P - 47	その他に同一個体とみられる3点がある。内外面とも黄褐色を呈する。 口縁上に浅い洗線をみ、やや外反する。内面接のハケ目を施した後、 もう一度斜めからのハケ目をみる。頸部から肩にかけ、ヘラケズリを みる。外面ハケ目をナデ羽す。	(13.25)			
20	"	B6-3層	口縁直上に沈線を持ち、口縁部付近でやや内湾する。内外面黄褐色を 呈し、胎上に長石を混入する。焼成ややあまい。	_	_		
21	"	B6-3層	淡黄白色を呈し、外面ハケ目の後、ナデ行う。内面横方向にハケ目つ ける。焼成良。胎土緻密である。口縁直上に浅い沈線をみる。	_	_		
22	"	B8-3層	4 点接合。その他に同一個体とみられるものが、2 点ある。内外面暗 赤褐色を呈し、外面粗いハケ目を斜めにみる。内面ナデ整形行う。や や口縁内湾ぎみである。	(18.0)	_		
23	"	B8-3層	内面黄褐色を呈し、外面茶褐色を呈する。内面ハケ目行い、外面ナデ行う。				
24	"	B8-3層	口縁部直上ほぼ平坦に作り,色調内外面黄褐色を呈する。内面ざらっ とし、外面ナデ整形をみる。口縁部端部付近で内湾する。		_		
25	"	B8-6層	黄褐色呈し、胎土やや荒い。焼成良。	_	_		

表 2 土師器②

表 2		土即希	16	,							
遗	物	図	版		d de Alby	法	;	量 (c	m)	/#:	·le
番	뭉	番	号	出土区	特	П	径	器	高	備	考
	 5図 I	19		B 6 P-31, 30	3 点接合。頸部から肩部へかけ、ヘラケズリをみ、口縁部やや内湾する。口縁部内面なめらかな細いハケ目をみる。外面も細いハケ目を部分的にみるが、ナデ消している。口縁部内外面、暗赤褐色を呈す。頸部から肩部にかけては茶褐色を呈す。		7.0)	_	_		
2	2	"		B8-3層	内外面ともに黒褐色を呈する。外反し外面口縁部波をうつ。 内面細いハケ目をつけ、外面ナデ整形行う。 口縁部ちょっとつまみあげた状態。 胎土良、焼成ややあまい。	(16	3.8)	_			
	3	"	2点接合。内外面, 赤褐色を呈するが, 部分的に黒褐色を呈す。 口線部外面斜めのハケを行うが、ナデ消し、 頸部から肩部にかけて、 細いハケ目を行う。 内面は口縁部横のハケ目を入れ、 頸部から肩部にかけては、 ヘラケズリをみる。 他に同一個体, 3点接合がある。 胎土, 荒い。 焼成不良。								
4	1	"		B8-3層 P-10,8,15	5点接合。1点同一個体がある。内外面黄褐色を呈し、口縁部、波をうつ。 胎土良。外面に粗いハケ目。内面にも粗いハケ目をみるが、ナデによって消し去っている。	(14	1.8)	_	-		
Ę	5	n		B 6 - 3層 P - 34, 33	3点接合。口縁部直上に浅い沈線をみる。口縁部が長く、 波をうつ。内外面にハケ目をみるが、外面は縦に内面は 横にそれぞれハケ目をみて、ナデ消され、部分的にみる。 内外面, 黄褐色を呈す。胎土、緻密な粘土使用。焼成良。	(20).8)	_	_		
(3	20		B 8 - 3 層 P - 5	口縁部やや内湾する。外面、黄褐色を呈し、内面赤褐色を呈す。外面全面にハケ目行うが、口縁部ナデ消す。 内面口縁ナデ行い、頸部から肩部にかけ、指のおさえによって、横ハケナデを部分的に消している。他に26点接合をみている。	(11	.4)				
	7	"		B 8 P – 16	内外面、茶褐色を呈する。外面口縁部ナデによってハケ 目を消すが、頸部にいくらか残る。 内面粗いへラによって整形する。 胎土良。焼成ややあまい。やや外反する口縁である。	(13	3.7)		_		
8	3	n		B8-3層	内外面, 暗黄褐色を呈する。外面粗いハケ目を口縁頸部, 肩部に分けてみる。 頸部から肩部にかけてヘラケズリ行う。 胎土やや良。長石6mm程のかたまりがまじる。 焼成ややあまい。口縁やや外反し直上に浅い沈線をみる。	(12	2.8)		_		
Ç)	11		B 6 - 3 層	2点接合。内外面赤褐色を呈し、口縁部内湾するものと みられる。 外面へラによるケズリ行い、みがく。 内面口縁部ヘラケズリし、頸部から肩部にかけ、暗文風 のケズリ残る。		_		_	最大征 17.	
1	0	"		B 6 - 3 層	外面黄褐色を呈し、内面赤褐色を呈する。 やや口縁部、波をうつ。 口縁部内外面ナデ消す。 焼成良。胎土良。				_		
1	1	,,		B8-3層	。 外面ハケ目をみるが、ナデによって消される。 内面ナデ行う。 胎土良。焼成良。内外面黄褐色を呈する。	-					

表 3	上師器③	J .				
遺物	図版	出土区	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	法	量(cm)	備考
第16図	番 号 21	B 3 - 3 層	内外面暗赤褐色を呈する。胎土荒い。焼成ややあまい。 口縁部外反する。口縁部先端やや厚く, 丸みを持つ。	口径 (16.6)	器高	
2	"	B 8 P - 18	口縁部大きく外反し、内外面黄褐色を呈する。断面黒色 を呈する。内面風化し、肌があれる。外面ナデ行う。胎 土やや荒い。焼成ややあまい。	13.8		
3	11	B1-3層	内外面ナデを行ったものであろうが、ローリングを受け 地肌があれる。胎土は長石を含む。色調は赤褐色を呈す る。	-		
4	"	B8-3層	胎土荒い。内外面暗黄褐色を呈する。焼成あまい。	_	_	
5	,,	B6-3層	口縁部直立してやや端部で外反する。外面粗いハケ目を口縁, 頸部, 肩部に施すが, 口縁部ナデ消している。内面, 口縁ナデ行い, 頸部から肩部, 粗いハケで整形する。胎土やや荒い。 焼成ややあまい。 内外面赤褐色を呈する。	(10.0)		
6	"	B 6 P - 8	内外面暗黄褐色を呈する。胎土良、焼成ややあまい。外 面頸部から口縁部にむけ細いハケ目を行い、ナデ消す。 内面ヘラケズリを頸部から肩部へ向かい行う。	_		
7	"	A X 6 P - 46	内外面赤褐色を呈する。口縁部外反し, 頸部付近に細い ハケ目をつける。内外面口縁部ナデる。 頸部から肩部へ 向う部分ヘラケズリを行う。			
8	11	B 3 P - 11	淡黄褐色。口縁部外反する。胎土良。焼成あまい。 内外面ナデ整形みる。			
9	"	B6-3層	焼成良。焼き締まっている。胎土やや荒い。黄褐色を呈する。口縁部は外反し、外面ハケ目ナデ消し、部分的に残る内面ナデを口縁部から頸部までみる。内面ヘラにより整形行い、デコボコの内面を呈する。外面頸部から肩部にかけ、横ナデを行い、それ以下を縦ナデ整形する。	14.2		
10	22	B 8 P - 2	3層の2点接合。口縁部を欠く。外面細いハケ目を付け, 内面指によるナデを行う。内外面黒褐色を呈する。断面 茶褐色を呈する。焼成あまい。			最大径 18.8cm
11	"	B 6 P-20	9点接合。口縁部内外ナデ行い,頸部から肩部にかけ細いハケ目をみる。内面横方向にハケ目をみる。内外面淡赤褐色を呈する。胎土,緻密であり,焼成良好。			
12	"	B3-3層	5点接合する。口縁と胴部を欠く。外面頸部まで粗いハケ目をみる。頸部から上はナテ整形,一部瘤状の粘土塊が付く。内面頸部までナデ行い,その下をヘラケズりする。内外面黄褐色を呈する。胎土良。焼成ややあまい。			
13	"	B 3 P - 6	内外面黄褐色を呈するが、摩耗が著しい。口縁部外反し、 ねるようになる。外面ナデ整形をみるようであるが、摩 耗のため不明。口縁部も摩耗するが、一部ナデあとがみ られる。頸部から肩部にかけ、ヘラによる搔き揚げ整形 をみる。胎土良。焼成ややあまい。	22.0		
14	П	A13-3層	2点接合。外面粗いナデ行う。内面口縁部まで粗いナデ をみる。以下はヘラケズリをみる。赤褐色を呈する。胎 土やや荒い。口縁直上沈線みる。	22.0		

表 4 土師器④

遺物	図 版	出土区	特	法	: 	量(cm)		備	考	
番号	番号	M T 12	15X	П	径	器	高	I/用	~5 ——	
第17図 1	22	B 8 P - 17	内外面赤褐色を呈する。ヘラミガキ整形。焼成ややあまい。胎土良。緻密な粘土用いる。	(13	3,2)					
2	"	B8-3層	高杯の杯の部分で、内外面赤桟色を呈する。断面黒色を呈する。焼成ややあまい。肩部から口縁部付近までヘラガキを行い、肩部から脚部へ向う部分は細いハケ目の後ナデ消し行う。				-	最大径 16.0cm		
3	"	B8-3層	2 点接合。高杯の杯部分とみられるもので、肩部つまみあげた状態をみる。肩部から口縁部へ向うところにハケ日をつけ、ナデ消しを行ったようである。内面にもハケ目残る。	_	_	-	-	最大徑 18.3		
4	"	B8-3層	外面赤褐色を呈し、内面暗黄褐色を呈する。外面細いハケ目をつけ、ナデ消す。内面ハケ目を残す。高杯の杯の部分。	_	_	-	- !			
5	"	B6-3層	2点接合。内外面黄褐色を呈する。外面細いハケ目でナ デ整形する。内面杯の部分との接合部が欠損するが、内 面にも細いハケ目を施す。	_			_	最大領 13.0		
6	23	B6-3層	内外面ナデミガキを行う。脚とのつなぎめを指でおさえ こむ。内外赤褐色を呈す。断面黒色を呈す。	-	_	_	-	-		
7	"	X 6 P-14, H	2点接合。内外面赤褐色を呈する。杯と脚部の接合部が 剝落したものである。	_	_	_	_	最大径 9.0		
8	"	X 6 P -46	外面明黄褐色をなす。やや脚中央部でふくらみかげんである。内面へラによるケズリをみる。焼成良。胎土やや荒めで、長石が混入する。	_	_	_	_	最大領 5.0)5cm	
9	"	B 6 P - 26	杯部を欠く脚である。中央部でややふくらみかげんに裾 部との境きっちりとわける。内外面黄褐色を呈する。	_	_	_	_	最大径 8.3	35cm	
10	"	B 8 P — 19	外面赤褐色部と黄褐色を呈する部分とがみられる。脚上 部ミズビキのあとが残り、下部ハケ目を斜めにめぐら す。これも裾部と脚の境をきっちり作る。			-	_	最大省 7.2		
11	,,	B 6 P-21	内外面黄褐色を呈し、断面黒色をなす。 ヘラケズリを行うが、外面風化がみられる。 内面ヘラケズリの痕跡をみる。	_	_	_	_	最大径 6.2		
12	"	Н	内外面黄褐色を呈する。上部にハケ目が残る。ヘラによって内外面調整を行う。胎土良。焼成ややあまい。	_	_	-	_	最大符 4.7	_	
13		X 6 P - 29	内外面黄褐色を呈す。薄い器壁を作り、内面裾部から脚部へきっちりした立ちあがりをみる。口縁部に浅い沈線をみる。粗いハケ目を作る。同一個体とみられる裾部片を他に一点みる。	_			_	底部径 12.6		
14	"	A13-4層	内外面赤褐色を呈する。焼成良。胎土良。口縁部が丸く なり、外面で浅い段をもつ。	_	_	_	_	底部省		
15	, ,,,	B8-3層	製塩土器か。内外面淡黄褐色を呈し、断面黒色をなす部分と黄褐色をなす部分がみられる。外面タタキをみ、内面指でおさえたような痕跡をみる。	_		_	_		-	
16	11	X 6 P-42	内外面赤褐色を呈し、底部指による成形である。脚から 胴部へ向うところにタタキを行ったような同心円の文様 がみられる。	-	_	_		底部径 4.0cm		
17	"	X 6 P-22	X6-42と同様の脚で指による整形である。	_			_	底部谷		

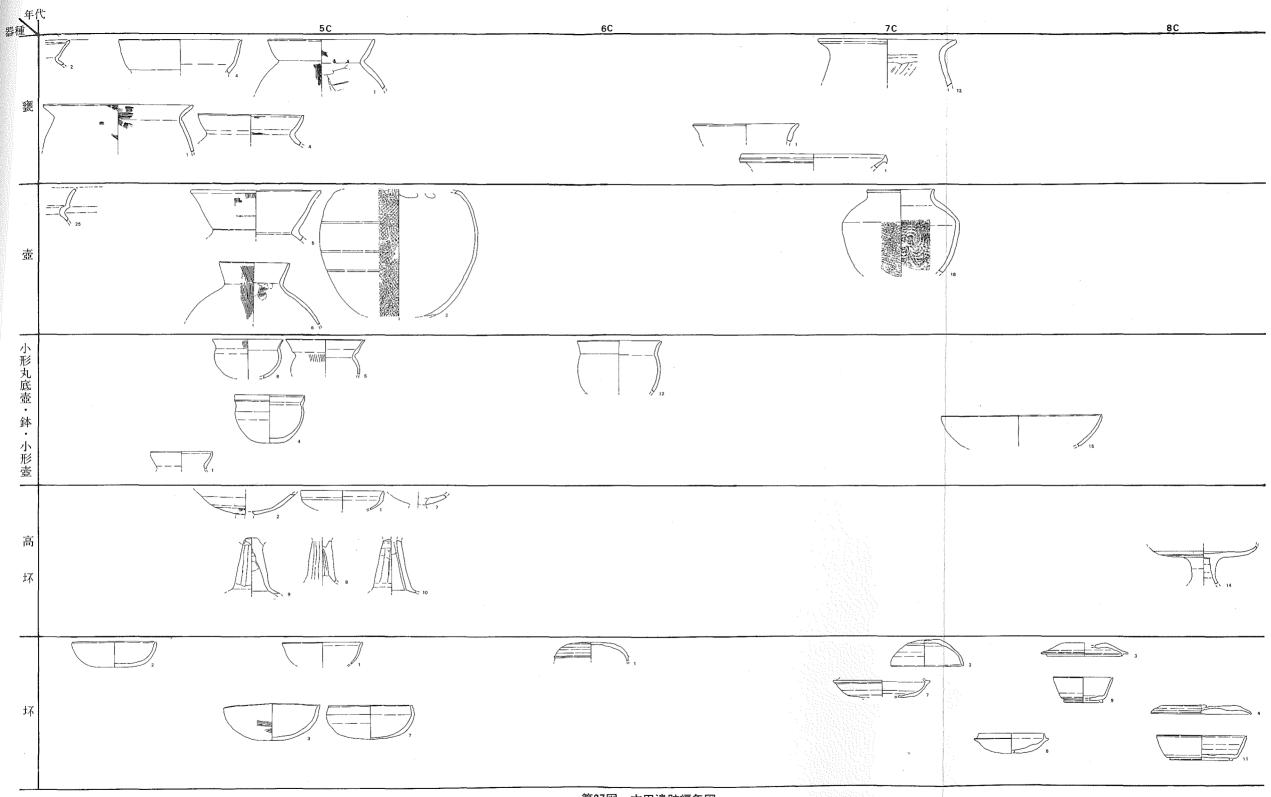
表 5 土師器(5)

表 5	上師器⑤	ע					
遺物	図版		N.A. ANY	法	量(cm)	/#	
番号	番号	出土区	特 数	口径	器高	備	考
第18図 1	24	B6-3層	口縁内面下に浅い沈線状の凹みが入っている。 やや口がひらきぎみの杯である。	(13.0)			
2	,,,	A-13-4層	内面煤ミガキを施し、黒色を呈する。外面暗黄褐色を呈す。 煤の付着を部分的にみる。 長石を胎土に混入するが、 緻 密な粘土使用する。外面口縁部から底部までケズリを行う。	13.4	4.1	,	,
3	n	6 X — 3 層 P —4, 7, 10	黄褐色を呈す。焼成良。胎土良。いびつな形状を呈する。 17点接合。	15.4	6.0		
4	"	X 6 P -12	口縁直上に沈線状の凹みがみられる。外面へラケズリ行 い,内面ミガキを行う。口縁外面つまみあげた状態。	_	_		
5	"	B 8 P — 9	赤褐色を呈し、外面ヘラケズリ行う。内面ミガキをかけ る。胎土緻密な粘土使用。		-	-	
6	"	B6-3層	口縁部から底部付近までヘラケズリをみ, みがきあげる。 内面ナデしあげ行う。内外面赤褐色を呈する。胎上緻密 な粘土使用。焼成ややあまいか。	(14.8)	_		
7	"	B 6 P - 24	外面へラケズリを行い,みがく。内面ナデ整形する。 内外面赤褐色を呈する。口縁部外面でやや内側へ傾く。 焼成良。	13.3	5.5		
8	"	X 6 P - 24	赤褐色内外面呈する。内面口縁部へかかる部分,やや引っかかりがある。外面口縁下を指によって内側へやや曲 げる。	15.1			
9	11	B6-3層	肩の部分より下をヘラでケズリ,肩より口縁部までをヘラケズリのあとみがく。内面ナデしあげ。内外面とも暗赤褐色を呈する。砂混入。	(16.0)	_		
10	"	B6-3層	口縁部でやや内側へ曲がり、胴部途中よりヘラケズリをみる。	15.8	_		
11	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	B6-3層	内面黄褐色を呈し、外面煤の付着によるものか、黒みを帯び、また胴部下部からヘラケズリを行う。ローリングし、口縁部ややすれる。	13.95			
12	n	B 6 P - 15	胴部途中までミガキをかけ、胴部から底部に向う部分まで、縦、横、斜めの方向にクシガキをみる。	<u> </u>			
13	n	B 6 P - 24	肩部から口縁部にかけ粗いハケ目を用い、胴内部から底 部付近にかけてヘラガキを行う。				
14	IJ	B6-3層	外面口縁部に至るところで内側へ向き、クシ状のもので ハケ目を肩部よりみる。内外面暗褐色を呈す。				
15	,,	X 6 P - 2	内外面赤褐色を呈する。(レンガ色) 口縁部から胴部途中までクシガキをみる。それ以下はヘ ラケズリを行い、みがく。内面ナデ整形をみる。	(13.9)			

表 6 土師器⑥

遺物	図版	th to the	d++ /All	法		量(cm)		/±±:	æk.
番号	番号	出土区	特	口	径	器	高	備	考
第19図 1	25	B8-3層	内外面暗赤褐色を呈する。内面, 外面ともにナデ整形する。口縁部湾曲するが, 口縁直上, やや丸みを持つ。	(9.	9)	-	-		
2	"	B8-3層	内外面暗黄褐色を呈し、断面赤褐色を呈する。頸部でや や内湾し、口縁部に向って外反する。胎土良。焼成やや あまい。	(6.9	95)	-	_		
3	"	X 6 - 3 層 P-49	2点接合。内外面ともにヘラミガキをみる。黄褐色を内外面ともに呈する。胎土緻密な粘土を使用。焼成良。口縁部やや内湾する。	6.2	25	-	_		
4	JJ	A X 6 P - 9	5 点接合。底部中央部がややへこむ丸底である。外面きれいにみがきあげるが、内面、肌につやがない。石英の粒が表面に多くみられる。なおAX6-3層と接合するものとみられる。	1:	1	7	. 3		
5	"	B6-3層	前から口縁にかけてナデ整形し、頸の部分から肩にかけてハケ目を施す。しかし、このハケ目を肩の部分ナデ消している。	12.	.7	-	_		
6	"	B6-3層	2点接合。胴部途中までナデ整形し、胴部下部はクシ状のものでケズリハケ目がつく。内面ナデ整形。	_	-	-	_	最大径 11.6	
7	"	A X 6 H	口緑部ナデ整形し、首部から肩にかけ、クシガキ文様を みるが、ナデ消し、うっすらみえる。内面ナデるがザラ ザラする。	-	-	_	_		
8	"	B 8 P – 4	ハケ目のあと、ヘラケズリを行い、ハケ目を消し、みが きあげる。そのため口縁部と底部付近にハケ目のあとが 残る。	11.	. 4	_			
9	"	B8-3層	内外面, 暗黄褐色を呈し, 外面ナデミガキをみるが, 内 面風化してザラザラした器面をみる。		-	-			
10	,,	B 6 P - 35	外面暗黄褐色を呈し、内面明黄褐色を呈する。胴部途中 からクシ状のヘラでケズリ、首から上をナデ整形する。 内面ナデ整形。	12.	45	_			
11	"	D21 P-26	内面赤褐色を呈し、口縁部黄褐色を呈する。外面煤の付着をみるが、色調赤褐色を呈す。内面細いハケ目を胴部 に施し、ケズる。		-	_	_	最大径 14.4	
12	"	B1-4層	媒の付着みえる。ローリング受け、整形痕不明確である。 赤褐色を呈する。	13.	. 6	_	-		
13	"	B6-3層	外面淡黒色を呈し、内面暗黄褐色をなす。厚みを持つ手 捏土器。			_		最大径 7.8	
14	26	A X 6-3層	焼成ややあまい。外面ミガキをかける。底部周辺、煤の付着をみる。内外面黄褐色を呈するが、風化が進み、底部やや尖りぎみである。		-	_		最大径 16.8	
15	"	B 6 P - 23	9点接合。内外面赤褐色を呈し、内面へラケズりを行い、 外面全体にミガキをかける。底部はわりとすわりのよい 丸底である。	_	-	_	_	最大径 21.5	

遺物	図版) [法	量(cm)	
番号	番号	出土区	特	口名		備考
第21図 1	28	B 6 P - 22	内面灰色を呈し、器面ザラッとした状態をみる。外面茶 褐色の斑点がまじる。淡灰色をなす。返りが小さい。天 上外面へラによるケズリが階段状をなす。断面灰色。	_		最大径 12.2cm
2	"	B 6 - 3層	17点接合。内外面灰色を呈する。フタ,時計まわりに作る。天上部ヘラケズリをみるが,かるい。いびつなケズ リ方をする。体部から口縁部にかけてはミズビキを行っ ている。	11.7	4.4	
3	"	B 6 P — 1	外面暗赤褐色を呈し、内面青灰色を呈する。生焼けの須 恵器か。口縁部細くつまみあげた形状をし、返しの部分 端は丸みを帯びる。	14.0	_	
4	"	B3-3層 P-8,9	13点接合。口縁部丸くおさめる。天上部,内面つまみを つけたためおしさげられ盛りあがる。内外面灰色を呈し, 断面灰色である。	15.9	1.4	つまみ 1.6cm
5	"	B 6 P - 28	B3区でみたものと同質の須恵器であるが、口縁先端部が厚みを持たず、尖りぎみである。内外面淡灰色を呈し、 断面も同様である。	(19.35	5) -	
6	"	B 3 P-2, 3, 9	内外面淡灰色を呈す。つまみ欠損するが、やや中央部から反りぎみに立ちあがる部分がみえる。口縁部から天上部までに2段の太い凹みをみる。	16.8		
7	"	Н	断面あずき色を呈し、内面灰色を外面暗灰色を呈す。口 縁部を欠く。ロクロ時計まわりにまわす。返りがみじか く、その下部反りきった状態から湾曲し、胴部へつづく。			最大径 15.6cm
8	"	E.F P-2, 3	かなりローリングを受け、破損部丸くすりへる。口縁たち あがりやや内湾する。返りがふくらみかげんに胴部へつ づく。内外面灰色を呈す。焼成時に内面ふくらんだ部分 がみられる。またヘラ記号とみられるものが底部にみえる。	12.05	3.3	基部径 10.4cm たちあがり高 0.8cm
9	11	B 6 P -11	高台外から内へやや丸みを持ちながら傾斜する。器面内 外面黒色を呈する。体部から底部へむけてややふくらみ かげんである。	9.6	4.1	高台径 6.35cm 高台高 0.5cm
10	n,	АО, Н	ローリングをうけ、器壁が丸みを帯びる。高台が斜めに 傾斜し、口縁部丸くつくる。淡灰色を内外面呈する。	14.4	3.8	高台高 3.8cm
11	"	B 3 P - 7	高台やや外から内へ傾斜する。内外面灰色を呈する。杯 と高台のはりつけ部分で平坦な面を作り、口縁部へたち あがる。2点接合。	14.25	5 4.0	高台径 10.15cm 高台高 0.4cm
12	"	B 3 P – 4	高台やや中央部が丸みを持つ形状を呈し、内面が湾曲する。高台と杯をはりあわせた部分から剝落した状態がみられる。また高台外面上部から水平に切りとったようにミズビキを行う。		_	高台径 9.1cm 高台高 0.5cm
13	29	B1-3層	内外面あずき色を呈す。断面も同様である。脚端部を引き出し、その上部に凹みをみ、段差ができる。胎土良。焼成堅牢。ローリングを受け、壁面丸みを帯びている。	_		
14	n n	B 8 P - 7	内外面灰褐色を呈する。口縁部を欠くが、杯と脚とを接合したとみられる部分がみえる。焼成ややあまいか。胎 土良。杯部はやや平坦な面を有する。脚外面はしぼりこ んだようなねじりがみられる。		_	最大径 17.3cm
15	,,,	B P-9	2点接合。内外面灰色を呈する。焼成時に口縁部の変形をきたしたとみられる部分がある。またその下に他の品物が付着する部分をみる。やや内湾する器形であり、口縁部尖りぎみに丸くした状態をみる。	25.85	5 –	
16	n	B 3 P-10	内外面淡灰色を呈す。外面肩部より胴部にがけ格子のタタキを行い、内面肩より下部に同心円文のタタキをかさねている。また内面にはロクロの整形痕がみられる。一部、整形時の圧痕が内面にみられる。	10.4		
17	"	B 8 P - 11	焼成ややあまい。色調灰色を呈するが、口縁部内面いぶ したような色調がみられる。	17.7	_	



第27図 古田遺跡編年図

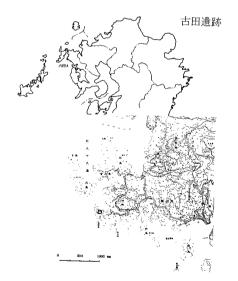
Ⅲ 長崎県小佐々町古田A遺跡出土の古墳時代人骨

はじめに

長崎県北松浦郡小佐々町楠泊免字古田に所在する古田A遺跡の範囲確認調査が1984年(昭和59年)に行なわれたが、この調査で、人骨が出土した。この人骨は古墳時代に属する人骨と考えられており、また保存状態は良好なものである。

長崎大学医学部解剖学第二教室では、日本人の成り立ちやその形質変化を明らかにするために、西日本各地から出土する古人骨の蒐集とその形質人類学的研究を続けている。長崎県では縄文時代および弥生時代人骨の出土例は比較的多く、特に、この地方の弥生時代人骨は日本人の形質変化を明らかにする上では、欠くことのできない貴重な資料として活用されている。このように縄文、弥生両時代人骨は比較的まとまった量が出土しているにもかかわらず、古墳時代人骨の出土例が著しく少なく、長崎県人の形質変化を、縄文時代から古墳時代まで時代を追って明らかにできないでいる。

本例は、保存状態も良好なもので、本県の古墳時代の貴重な資料となるものであり、また、 きわめて興味ある所見も認められたので、その特徴などを報告しておきたい。



第1図 古田遺跡位置図

資 料

本遺跡から出土した人骨は2体分の人骨である。そのうちの1体は、一部撹乱を受けてはいたが、大部分は埋葬されたままの状態で出土した。残りの1体は散乱状態で出土したもので、残存していたのは頭蓋片のみであった。なお、各人骨の性別、年令は表1に示すとおりである。

表 1 出土人骨一覧

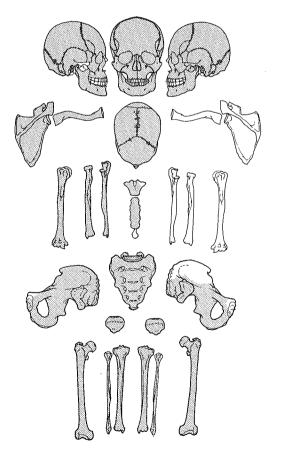
人骨番号	性別	年令	備	考
1号人骨	男性	壮年		
2号人骨	不明	壮年	散乱,頭蓋	蓋片のみ

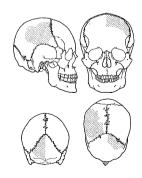
* Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Shoji NAKATANI,
Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University
(長崎大学医学部解剖学第二教室)

計測方法は、Martin-Saller (1957)によったが、一部は Howells (1973)の方法で計測した。また、この人骨は、別稿で述べられているとおり、考古学的所見より、古墳時代の終末 (7世紀) ころに属するものと推定される。

また脛骨の横径はオリビエの方法で計測し、鼻根部については鈴木(1963)の方法と松下(1983 c)の方法で、歯の計測は藤田(1949)の方法で行なった。

比較資料としては、西北九州弥生人(内藤, 1971)、大友弥生人(松下, 1981)、朝田古墳人(松下, 1982, 松下・他, 1983) および宮崎県の地下式横穴から出土した古墳人(灰塚, 上の原, 旭台, 大萩, 日守の各遺跡から出土した人骨の平均値を「地下式横穴古墳人」とした。)を用いたが、顔面頭蓋に現代的な特徴が認められたので、当教室保管の近代人(明治生まれの人)骨を計測して、これを比較に用いた。





第2図 1号人骨残存状態(椎骨,助骨,手の骨は省略した) 第3

第3図 2号人骨残存状態

所 見

1号人骨(男性, 壮年)

人骨の残存状態は図2に示すとおりであり、また、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

1.頭蓋

(1) 脳頭蓋

完全に残存していた。外後頭隆起の発達は良好で、最上項線、上項線ともに明瞭であるばかりではなく、両者の間には横走する隆起、いわゆる後頭隆起が認められる。乳様突起はそれほど大きいものではなく、外耳道骨腫は両側とも認められない。三主縫合は単純で、すべて内外両板とも開離している。

計測値を他の資料と比較しながら、検討してみた。表 2 に示すように、頭蓋最大長は176mm、頭蓋最大幅は139mmで、この両径とも、比較資料のいずれよりも小さい。バジオン・ブレグマ高は140mmで、この計測値は大きく、長崎近代人の平均値にきわめて近く、頭の高さは高い。頭蓋長幅示数は78.98となり、頭型としては中頭型に属している。古墳時代人骨のうちで、宮崎県の地下式横穴出土の古墳時代人骨についてはその特徴が次第に明らかになりつつあり、頭型は一般的に短頭性が強く、また、山口市の朝田墳墓群のうちの横穴墓出土の古墳時代人骨の頭型は長頭に傾いたものであった。西北九州地域の古墳時代人の頭型については、資料数が小さく、まだ明確にすることができないが、本例は中頭型であり、その示数値は比較的西北九州弥生人の値に近いものである。

頭蓋水平周は604mm, 横弧長は302mm, 正中矢状弧長は364mmで, この三径はいずれも小さく, 頭蓋水平周, 横弧長は比較に用いたいずれの資料よりも小さく, 頭蓋の径が小さいことがうかがわれる。

表 2 脳頭蓋計測値 (男性, mm)

		古田 A 1 号人骨	西北九州弥生人 <u>(内藤)</u> n M		地下式横穴古墳人 <u>(松下)</u> n M		朝田古墳人 <u>(松下)</u> n M			奇近代人 (松下) M
1.	頭蓋最大長	176	21	182.81	6	183.50	4	183.00	37	183.00
8.	頭蓋最大幅	139	20	144.95	8	143.75	2	143.00	37	142.84
17.	バジオン・ブレグマ高	140	15	134.60	11	136.46	2	130.00	37	139.87
8/1	頭蓋長幅示数	78.98	20	79.17	1	80.56	2	76.71	37	78.13
17/1	頭蓋長高示数	79.55	15	74.15	5	73.82	2	73.93	37	76.49
17/8	頭蓋幅高示数	100.72	14	93.11	5	94.79	1	92.25	37	98.03
23.	頭蓋水平周	504	19	530.42	1	523	1	525	37	518.62
24.	横弧長	302	15	324.67	5	313.20	1	306	37	316.95
25.	正中矢状弧長	364	17	376.47	3	372.33	2	359.00	37	374.24

(2) 顔面頭蓋

右側の類骨弓を欠く以外はほぼ完全である。眉上弓の隆起はやや強く、また、鼻骨も鼻根寄り 1/3 あたりからやや強く隆起している。鼻骨や鼻根部は狭く、鼻骨の鼻骨間縫合へ向かう隆起は強く、また、上顎骨前頭突起のむきは矢状位である。すなわち、鼻根部は狭く、かつ鼻骨の隆起も強いもので、この鼻根部の形態は西北九州弥生人や宮崎県の地下式横穴古墳人とも

朝田古墳人とも異なるもので、現代的な特徴が認められる鼻根部である。そこで、鼻根部について、他の資料と比較してみることにした。表3に示すとおり、前眼窩間幅は14mm、鼻根横弧長は17mmで、両径ともいずれの資料よりも小さく、鼻根部の狭いことがうかがわれる。鼻根彎曲示数は82.35となり、この示数値は西北九州弥生人ほど小さくはないが、その他の資料よりは小さく、朝田古墳人のようには鼻骨や鼻根部は扁平ではない。眼窩間示数は15.38となり、この示数値もいずれの資料よりも小さく、鼻根部が幅広くないことがわかる。また、鼻根角は(131)度で、この角度も西北九州弥生人ほど小さくはないが、他の資料よりも小さい。このように本例の鼻根部には、西北九州弥生人的な特徴が認められず、中・近世を通り越して近代人的である。一方、前頭突起水平傾斜角は80度で、この角度は小さい。この角度は上顎骨前頭突起のむきが矢状位をしている縄文人が小さく、弥生、古墳、中世と時代が下がるに従って、大きくなることがわかっている。しかし、近代に入るとまた小さくなるような傾向が認められるので、この角度が小さいことは近代人的な特徴と矛盾するものではない。

表 3 鼻根部計測値 (男性, mm, 度)

		古田 A 1 号人骨		九州弥生人 (松下)		式横穴古墳人 (松下)		田古墳人 (松下)		奇近代人 (松下)
			n	M	n	M	n	M	. n	M
50.	前眼窩間幅	14	14	18.79	15	19.87	5	19.60	37	16.62
	鼻根横弧長	17	13	24.39	13	23.46	5	22.00	37	19.35
	鼻根彎曲示数	82.35	13	76.72	13	83.42	5	88.98	37	86.26
57.	鼻骨最小幅	7	13	10.23	14	10.14	5	8.80	35	7.66
44.	両眼窩幅	91	19	102.37	9	101.56	5	106.00	37	96.54
50/44	眼窩間示数	15.38	16	18.12	8	19.83	2	18.88	37	17.22
	前頭突起上幅(右)	99	15	8.60	13	10.62	5	9.60	37	8.97
	(左)	9	17	8.88	12	10.33	5	9.60	37	9.19
	前頭突起水平傾斜角	80	12	84.83	9	85.67	4	113.75	37	87.27
	G-N投影距離	2	24	2.33	10	2,20	1	2	37	2.57
	鼻根角	(131)	9	129.78	10	137.00	4	144.75	34	134.53
	鼻根陥凹示数	_	9	18.48	10	18.76	4	13.08	34	16.79

表 4 顔面頭蓋計測值 (男性, mm, 度)

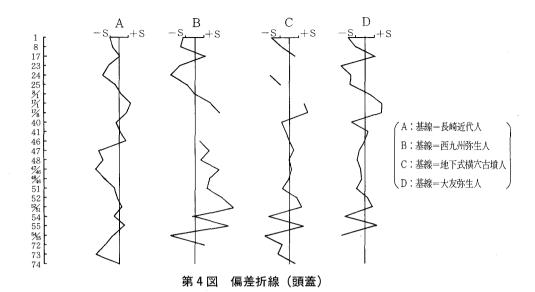
		古田 A 1 号人骨		九州弥生人[内藤]	地下	式横穴古墳人 (松下)	朝田古墳人 <u>(松下)</u>			奇近代人 松下)
			n	M	n	M	n	M	n	M
40.	顔 長	96		and a	10	101.30	3	93.33	35	97.54
41.	側顔長	72		-	13	73.31	4	70.75	37	71.76
45.	頰骨弓幅	_	12	138.42	6	141.00	1	(140)	37	134.35
46.	中顔幅	101	17	105.00	10	101.10	3	104.67	36	97.50
47.	顔 高	115	14	117.07	11	113.36	3	118.00	19	125.53
48.	上顔高	64	17	68.06	15	64.20	5	67.60	35	69.91
47/46	顔示数(V)	113.86	14	111.78	7	112.99	2	115.86	19	129.13
48/46	上顔示数(V)	63.37	17	64.84	8	63.56	3	66.59	34	71.40
51.	眼窩幅(左)	42	15	43.07	12	43.17	3	45.67	37	43.05
52.	眼窩高(左)	34	15	32.80	18	32.78	3	36.67	37	34.38
52/51	眼窩示数(左)	80.95	15	76.18	12	76.71	3	80.41	37	79.92
54.	鼻幅	24	16	27.75	20	27.75	4	27.25	37	25.08
55.	鼻高	54	16	51.00	18	50.00	5	52.40	37	52.78
54/55	鼻示数	44.44	16	54.41	18	55.01	4	51.44	37	47.67
72.	全側面角	79	15	82.00	12	82.38	5	87.60	34	83.32
73.	鼻側面角	79		_	14	85.75	5	86.60	35	85.77
74.	歯槽側面角	77			13	71.69	5	69.40	34	77.00

次に、その他の顔面頭蓋の計測値を検討してみると、表4に示しているとおり、頬骨弓幅は計測できないが、左側の頬骨弓が残存しているので、正中矢状面までの距離を2倍して、推定値を出してみると、67mm×2=134mmとなり、頬骨弓幅はあまり広いものではなく、頬骨の張り出しは弱い。しかし、中顔幅は101mmで、西北九州弥生人や朝田古墳人よりは小さいものの、近代人よりは大きく、地下式横穴古墳人の平均値に近く、中顔幅はあまり狭くはない。一方、顔高は115mm、上顔高は64mmと顔の高径は著しく低く、比較的地下式横穴古墳人の平均値に近い。従って、顔示数や上顔示数はそれぞれ、113.86、63.37となり、両示数値とも近代人より小さく、著しい低・広顔傾向を示す西北九州弥生人や地下式横穴古墳人に近い。すなわち、顔全体のプロポーションは近代人的ではなく、むしろ西北九州弥生人や地下式横穴古墳人に近いものである。

眼窩幅は44mm(右), 42mm(左), 眼窩高は34mm(右), 34mm(左)で, 眼窩示数は75.00(右),80.95 (左)となり, 右側は chamaeknoch (低眼窩)に, 左側は mesokonch (中眼窩) に属している。 左側について比較してみると, 眼窩の諸径は比較的, 長崎近代人に近いようである。

また、鼻幅は24mmで、どの資料よりも小さく、鼻高は54mmで、これはどの比較群よりも大きい。 従って、鼻示数は44.44となり、leptorrhin (狭鼻)に属しており、この示数値はいずれよりも小 さいが、比較群の中では比較的近代人に近い示数値である。全側面角は79度、鼻側面角は79度、 歯槽側面角は77度である。歯槽側面角は朝田古墳人や地下式横穴古墳人よりは大きく、近代人の 平均値と一致し、歯槽性の突顎傾向はほとんど認められない。

次に、頭蓋の特徴をより明確に把握するために、基線を変えて偏差折線を描いてみた。図4に示しているように、西北九州弥生人を基線にとった場合が、最も振幅が大きい。近代人にとった場合は顔高、上顔高、顔示数などで振幅が大きいが、その他の項目では比較的小さい。一方、地下式横穴古墳人や大友弥生人にとった場合は、近代人の場合とは反対に顔高、上顔高、顔示数などで、振幅が小さく、顔面全体のプロポーションがこれらと酷似していることがわかる。もう少し、比較資料との近遠関係をはっきりさせるため、ペンローズの大きさ距離と形態距離を算出してみた(13項目、標準偏差は関東現代人を使用)。図5に示しているように、大きさは地下式横穴古墳人に最も近く、次いで近代人、西北九州弥生人、大友弥生人の順で、朝田古墳人との距離は大きい。また、形態距離は近代人に最も近く、次いで大友弥生人、西北九州弥生人、地下式横穴古墳人となり、朝田古墳人とは形態距離においても最も遠く、また、近代人と大友弥生人との間にはややひらきがある。すなわち、本例の頭蓋は径がやや小さく、顔面頭蓋には低・広顔傾向が認められるが、鼻根部や鼻部などには近代人的特徴が認められ、総合的に判断すれば、形態的には近代人に最も近いようである。



(3) 下顎骨

下顎骨についても特筆することがある。それは下顎角が著しく外反していることである。下 顎角幅は下顎関節突起幅と同じ 119 mmである。一般の下顎骨では,下顎角幅は下顎関節突起幅 よりも小さく,本例のように両幅径が同じ値という下顎骨を,今まで私達は実見したことはな かった。縄文人の中にはこれと似たものがあるかもしれないと,主な資料を検討してみたが, これ程までに外反したものは捜し出すことができなかった。ところが同じ古墳時代人骨の中に, これとよくにた形態をもつ下顎骨を見出した。それは熊本県八代市の清水1号古墳出土の下 顎骨である。保存状態が悪いので,下顎角幅は計測できないが,かなり広そうで,下顎角の外 反の形態は本例と酷似している。地理的にも近い隣県の古墳時代人骨の中によく似たものがあ ることは,本例の下顎骨以外にみられる形態的特徴を考察する上でもきわめて示唆的である。

また、オトガイ結節が著しく発達しており、その上縁部には溝が形成されている。このような下顎骨の特異な形態が、下顎骨以外の近代的な形態とあまりにもかけ離れすぎていたため、下顎骨は別個体かとも疑ってみたが、歯のかみ合せや咬耗状態などから、同一個体と判断できるものであった。

このように、下顎骨以外は近代的であるのに反し、下顎骨の形態があまりにも異様であるが、 この特異な形態を備えているのが、本例の最大の特徴である。

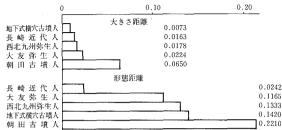
(4) 歯

歯は上下両顎とも釘植した状態で、良く残存していた。残存歯を歯式で表すと次のとおりである。

$$M_2 \bigcirc P_2 P_1 \bigcirc I_2 I_1$$
 $\bigcirc I_2 \bigcirc P_1 \bigcirc M_1 M_2$ $M_3 M_2 M_1 P_2 P_1 \bigcirc I_2 I_1$ $I_1 I_2 \bigcirc P_1 P_2 M_1 M_2 M_3$ [○: 歯槽開存]

咬耗度は Broca の1度で, 咬耗は著しく弱い。下顎右側のM3はやや水平方向に傾斜して植立しており(水平智歯), 上顎のM3は両側とも未萌出(先天的欠損)である。また, 風習的抜歯の痕

跡は認められない。



(1) 鎖 骨

右側のみが残存していた。長さは長く,細い。

第5図 ペンローズの大きさ距離と形態距離・頭蓋 (13項目)

(2) 上腕骨

2. 四肢骨

1)上肢骨

右側のみが完全な状態で残存していた。長さはそれほど長いものではなく, 骨頭も小さいが 三角筋粗面の発達は良好である。

計測値は最大長が295mm(右), 骨体最小周は64mm(右), 中央周は69mm(右)で, 長厚示数は21.69 (右)である。また, 中央最大径は23mm(右), 中央最小径は18mm(右)で, 骨体中央断面示数は78.26 (右)となり、骨体の扁平性は弱い。

他の資料と比較してみると(表 5), 大きさでも形態的にも西北九州近・現代人や朝田古墳人に最も近いようである。

表 5 上腕骨計測值 (男性, 右, mm)

		古田 A 1 号人骨	大友弥生人 <u>(松下)</u>		大萩古墳人 <u>(松下,他)</u>		朝田古墳人 (松下,他)_		西北九州人 <u>(八木)</u>	
			n	M	n	M	n	M	n	M
1.	上腕骨最大長	295	9	294.33	1	291	1	299	72	296.35
2.	上腕骨全長	286	8	291.75	1	288	1	294	72	290.35
5.	中央最大径	23	37	24.46	3	22.33	3	23.00	72	23.56
6.	中央最小径	18	37	17.97	3	16.67	3	17.67	72	17.68
7.	骨体最小周	64	37	64.57	3	57.00	1	62	72	65.53
7(a)	.中央周	69	35	71.00	3	65.33	3	68.00	72	68.78
6/5	骨体断面示数	78.26	37	73.60	3	74.71	3	76.84	72	75.06
7/1	長厚示数	21.69	9	22.32	1	20.27	1	20.74	72	22.10

表 6 大腿骨計測值 (男性, 右, mm)

		古田A 1号人骨		友弥生人 (松下) M		萩古墳人 		田古墳人 松下,他) M		比九州人 (栄田) M
1.	最大長	410	15	413.60	2	410.00	2	410.00	52	412.75
6.	骨体中央矢状径	26	41	28.85	6	27.67	6	27.17(左)	52	27.79
7.	骨体中央横径	26	41	26.07	6	25.33	6	26.67(左)	52	25.81
8.	骨体中央周	82	41	87.22	6	83.33	6	85.17(左)	52	83.46
9.	骨体上横径	31	42	30.62	2	30.50	6	30.17(左)	52	28.21
10.	骨体上矢状径	24	42	24.83	2	22.50	6	24.50(左)	52	27.02
8/2	長厚示数	20.25	15	21.13	2	20.63	2	21.03	52	20.43
6/7	骨体中央断面示数	100.00	41	111.72	6	109.40	6	102.03(左)	52	108.04
10/9	上骨体断面示数	77.42	42	81.34	2	73.76	6	81.29(左)	52	96.54

(3) 橈 骨

右側のみが完全に残存していた。長さはやや長く、骨体はそれほど太いものではない。骨間縁は骨体近位1/3あたりで鋭く突出している。

(4) 尺 骨

尺骨も右側のみが完全な状態で残存していた。長さはやや長いが、骨体は細い。

2) 下肢骨

(1) 寛 骨

右側はほぼ完全であるが、左側は腸骨翼と恥骨の一部を欠損している。径はあまり大きくは ない。大坐骨切痕の角度は小さい。

(2) 大腿骨

左右とも完全である。長さはあまり長いものではなく、また、粗線の発達も悪いが、骨体上部 は扁平である。

計測値は,最大長が410mm(右),409mm(左),骨体中央周は82mm(右),81mm(左)で,骨体は男性としてはやや細く,長厚示数は20.25(右),20.05(左)である。骨体中央矢状径は26mm(右),24mm(左),横径は26mm(右),27mm(左)で,骨体中央断面示数は100.00(右),88.86(左)となり,粗線や骨体両面の後方への発達はきわめて悪い。

他の資料と比較してみると(表 6), 長さは大萩古墳人や朝田古墳人の平均値に一致し、骨体の太さは大萩古墳人に近い。また、骨体の形態は朝田古墳人に近いが、骨体上部の扁平性はこれよりも強い。

(3) 脛 骨

両側ともほぼ完全である。長さは長いものではなく、骨体も細い。前縁はS字状のカーブを描いており、ヒラメ筋線の発達も悪い。骨体の断面形は両側ともヘリチカのV型を呈している。

計測値は, 脛骨最大長が338mm(右), 339mm(左), 骨体周は76mm(右), 75mm(左), 最小周は71 mm(右), 69mm(左)で, 骨体は細く, 長厚示数は21.32(右), 20.72(左)である。中央最大径は29 mm(右), 28mm(左), 中央横径は19mm(右), 18mm(左)で, 横径が小さく, 従って, 中央断面示数は65.52(右), 64.29(左)となり, 骨体は扁平である。

他の資料と比較してみると(表 7), 長さは大友弥生人より短く,近・現代人の平均値に近い。 骨体周や最小周はどの資料よりも小さく,骨体が細いことがうかがわれる。また,中央断面示 数は比較に用いた 4 群よりも小さく,骨体は扁平である。

表7 脛骨計測值(男性,右, mm)

		古田 A 1 号人骨		大 友 尔生人	大 古	萩 墳人	刺世	田 「墳人	西丰	上九州人
			(松下)	(松	下,他)	(松	下,他)	(久松)
			n	M	n	M	n	M	n	M
1.	脛骨全長	333	12	339.58		_			72	331.88
1a.	脛骨最大長	338	14	347.86				_	72	339.12
1b.	脛 骨 長	329		_	1	357			72	325.78
8.	中央最大径	29	35	31.26	4	29.00	2	29.50	72	28.52
8a.	栄養孔位最大径	30	30	34.63	3	32.00	2	34.00	72	31.02
9.	中央横径	19	38	21.29	4	20.25	2	21.50	72	21.55
9 a .	栄養孔位横径	22	32	23.22	3	22.23	2	24.00	72	24.71
10.	骨体 周	76	34	82.85	4	78.25	2	80.00	72	80.45
10 a .	栄養孔位周	84	30	82.00	3	87.33	2	92.00	72	89.10
10b.	最 小 周	71	34	75.35	3	74.00	2	75.00	72	71.64
9/8	中央断面示数	65.52	34	68.03	4	69.94	2	72.81	72	75.76
9 a /8 a	栄養孔位断面示数	73.33	30	67.16	3	69.96	2	70.48	72	79.81
10b/1	長厚示数	21.32	12	21.88		_			72	21.76

(4) 腓 骨

両側ともよく残存していた。長さは短いが、骨体はやや大きい。

3. 推定身長値

大腿骨、脛骨、上腕骨および橈骨のそれぞれ最大長から Pearsonおよび藤井の式を用いて算出してみた(表 8)。右大腿骨からは158.39cm(Pearsonの式)、156.17cm(藤井の式)となり、低身長である。 Pearsonの式から算出した推定値を他の資料と比較してみると、表 9 に示しているとおり、比較に用いた資料とほとんど大差なく、朝田古墳人の平均値に一致している。

表 8 推定身長値(cm)

表 9 推定身長値 (男性, cm, 右大腿骨, Pearson)

	古田A1号人	、骨男性
	Pearsonの式	藤井の式
大腿骨(右) 158.39	156.17
(左		155.81
脛 骨(右		157.49
(左		157.55
上腕骨(右		155.55
(左		
橈 骨(右		160.20
(左) —	

n M n M n M	n M
	11 171
158.39 16 158.79 15 159.06 2 158.39	2 158.39

4. 性別・年令

性別は、大坐骨切痕の角度が小さいことや頭蓋の形態から男性と推定した。年令は、縫合が 内外両板ともに開離していること、恥骨結合面に平行隆線が残存していることから、壮年と考 えられる。

2号人骨(性別不明,壮年)

前頭骨前頭鱗の左側部,右側側頭骨および後頭骨左側半が残存していたにすぎない(第3図)。 骨壁はやや薄い。また冠状縫合とラムダ縫合の一部が観察できた。この縫合はいずれも内外 両板とも開離していたものと考えられることから,年令は壮年と推定したが,性別は不明である。

表11 顔面頭蓋計測値 (mm, 度)

10 脳頭蓋計測値 (mm)			表11 顔面頭蓋計測值 (mm, 度)		
		古田 A 1 号人骨 男性			古田 A 1 号人骨 男性
1.	頭蓋最大長	176	40.	顔 長	96
8.	頭蓋最大幅	139	41.	側顔長	72
17.	バジオン・ブレグマ高	140	42.	下顔長	105
8/1	頭蓋長幅示数	78.98	43.	上顔幅	102
17/1	頭蓋長高示数	79.55	45.	頰骨弓幅	
17/8	頭蓋幅高示数	100.72	46.	中顔幅	101
	頭蓋モズルス	151.67	47.	顔 高	115
5.	頭蓋底長	102	48.	上顏高	64
9.	最小前頭幅	88	47/45	顔示数(K)	_
10.	最大前頭幅	114	48/45	上顔示数(K)	_
11.	両 耳 幅	127	47/46	顔示数(V)	113.86
12.	最大後頭幅	107	48/46	上顔示数(V)	63.37
7.	大後頭孔長	36		顔面モズルス	<u>·</u>
16.	大後頭孔幅	34	50.	前眼窩間幅	14
16/7	大後頭孔示数	94.44	44.	両眼窩幅	91
23.	頭蓋水平周	504	50/44	眼窩間示数	15.38
24.	横 弧 長	302	51.	眼窩幅(右)	44
25.	正中矢状弧長	364		(左)	42
26.	正中矢状前頭弧長	114	52.	眼窩高(右)	33
27.	正中矢状頭頂弧長	133		(左)	34
28.	正中矢状後頭弧長	117	52/51	眼窩示数(右)	75.00
29.	正中矢状前頭弦長	102	,	(左)	80.95
30.	正中矢状頭項弦長	118	54.	鼻幅	24
31.	正中矢状後頭弦長	99	55.	鼻高	54
29/26	矢状前頭示数	89.47	54/55	鼻示数	44.44
	矢状頭項示数	88.72	57.	鼻骨最小幅	7
31/28	矢状後頭示数	84.62	60.	上顎歯槽長	49
	Vertex Rad.	122	61.	上顎歯槽幅	66
	Nasion Rad.	91	62.	口蓋長	_
	Subsp. Rad.	95	63.	口蓋幅	45
	Prosth. Rad.	99	64.	口蓋高	12
			61/60	上顎歯槽示数	134.69
				口蓋示数	
				口蓋高示数	26.67
			72.	全側面角	79
			73.	鼻側面角	79
			74.	歯槽側面角	77

		古田A 1 号人骨 男性右			古田 A 1 号人: 男性
50.	前眼窩間幅	14	65.	下顎関節突起幅	119
	鼻根横弧長	17	65(1).	下顎筋突起幅	· <u> </u>
	鼻根彎曲示数	82.35	66.	下顎角幅	119
57.	鼻骨最小幅	7	67.	前下顎幅	48
44.	両眼窩幅	91	68.	下顎長	70
50/44	眼窩間示数	15.38	68(1).	下顎長	106
	前頭突起上幅(右)	9	69.	オトガイ高	33
	(左)	9	69(1).	下顎体高(右)	31
	前頭突起水平傾斜角	80		(左)	30
	G-N投影距離	2	69(2).	下顎体高(右)	27
	鼻根角	(131)		(左)	26
	G-R距離	_	70.	枝 高(右)	61
	垂線高	_		(左)	57
	鼻根陥凹示数	-	70(1).	前枝高(右)	-
			(=, ,	(左)	61
			70(2),	最小枝高(右)	53
			(2).	(左)	49
			70(3).	下顎切痕高(右)	4J
4 AV III.	⇒L2nd7+ /)		(0).	(左)	13
4 頭筒	計測値 (mm)		71.	枝幅(右)	32
		古田A 1 号人骨		(左)	31
		男性	71a.	最小枝幅(右)	32
1.	鎖骨最大長	147	ila.	(左)	32 31
2.	骨体彎曲高	6			
		Ü	71 (1)	工配知语唱(十)	91
2 a .	骨体彎曲高	28	71(1).	下顎切痕幅(右)	_
	骨体彎曲高 肩峰端彎曲高		. ,	(左)	- 37
		28	71(1). 79.	(左) 下顎枝角(右)	- 37 131
2(1).	肩峰端彎曲高	28 29	79.	(左) 下顎枝角(右) (左)	37 131 127
2(1). 3.	肩峰端彎曲高 骨体彎曲弦長	28 29 100	79. 66/65	(左) 下顎枝角(右) (左) 下顎幅示数	- 37 131 127 100.00
2(1). 3. 4.	肩峰端彎曲高 骨体彎曲弦長 中央垂直径	28 29 100 11	79. 66/65 68/65	(左) 下顎枝角(右) (左) 下顎幅示数 幅長示数	37 131 127 100.00 58.82
2(1). 3. 4. 5. 6.	肩峰端彎曲高 骨体彎曲弦長 中央垂直径 中央矢状径	28 29 100 11 11	79. 66/65	(左) 下顎枝角(右) (左) 下顎幅示数 幅長示数 下顎高示数(右)	- 37 131 127 100.00 58.82 81.82
2(1). 3. 4. 5. 6. 6/1	肩峰端彎曲高 骨体彎曲弦長 中央垂直径 中央矢状径 中 央 周	28 29 100 11 11 39 26.53	79. 66/65 68/65 69(2)/69	(左) 下顎枝角(右) (左) 下顎幅示数 幅長示数 下顎高示数(右) (左)	
2(1). 3. 4. 5. 6. 6/1 2a/1	肩峰端彎曲高 骨体彎曲弦長 中央垂直径 中央矢状径 中 央 周 長厚示数 彎曲示数	28 29 100 11 11 39 26.53 19.05	79. 66/65 68/65	(左) 下顎枝角(右) (左) 下顎幅示数 幅長示数 下顎高示数(右) (左) 下顎枝示数(右)	
2(1). 3 . 4 . 5 . 6 . $6/1$ $2a/1$ $4/5$	肩峰端彎曲高 骨体彎曲弦長 中央垂直径 中央矢状径 中 央 周 長厚示数 彎曲示数 鎖骨断面示数	28 29 100 11 11 39 26.53 19.05 100.00	79. 66/65 68/65 69(2)/69 71/70	(左) 下顎枝角(右) (左) 下顎幅示数 幅長示数 下顎高示数(右) (左) 下顎枝示数(右) (左)	
2(1). 3 . 4 . 5 . 6 . $6/1$ $2a/1$ $4/5$	肩峰端彎曲高 骨体彎曲弦長 中央垂直径 中央矢状径 中 央 周 長厚示数 彎曲示数	28 29 100 11 11 39 26.53 19.05	79. 66/65 68/65 69(2)/69	(左) 下顎枝角(右) (左) 下顎幅示数 幅長示数 下顎高示数(右) (左) 下顎枝示数(右) (左) 下顎枝示数(右) (左)	37 131 127 100.00 58.82 81.82 78.79 52.46 54.39 60.38
2(1). 3 . 4 . 5 . 6 . $6/1$ $2a/1$ $4/5$	肩峰端彎曲高 骨体彎曲弦長 中央垂直径 中央矢状径 中 央 周 長厚示数 彎曲示数 鎖骨断面示数	28 29 100 11 11 39 26.53 19.05 100.00	79. 66/65 68/65 69(2)/69 71/70 71a/70(2)	(左) 下顎枝角(右) (左) 下顎幅示数 幅長示数 下顎高示数(右) (左) 下顎枝示数(右) (左) 下顎枝示数(右) (左)	- 37 131 127 100.00 58.82 81.82 78.79 52.46 54.39
2(1). 3 . 4 . 5 . 6 . $6/1$ $2a/1$ $4/5$	肩峰端彎曲高 骨体彎曲弦長 中央垂直径 中央矢状径 中 央 周 長厚示数 彎曲示数 鎖骨断面示数	28 29 100 11 11 39 26.53 19.05 100.00	79. 66/65 68/65 69(2)/69 71/70 71a/70(2)	(左) 下顎枝角(右) (左) 下顎幅示数 幅長示数 下顎高示数(右) (左) 下顎枝示数(右) (左) 下顎枝示数(右) (左)	37 131 127 100.00 58.82 81.82 78.79 52.46 54.39 60.38

表16 上腕骨計測値 (mm)

15 肩甲骨計測値 (mm)			3-C-2-0	表16 上腕骨計測値 (mm)		
		古田 A 1 号人骨 男性 右			古田 A 1 号人骨 男性 右	
1.	肩甲骨形態学幅	161	1.	上腕骨最大長	295	
2.	肩甲骨形態学長	100	2.	上腕骨全長	286	
2a.	肩甲骨長	108	3.	上端幅	45	
3.	腋窩縁長	139	3(1).	横 上 径	48	
4.	上 縁 長	75	4.	下端幅	61	
5.	棘下窩投影幅	111	5.	中央最大径	23	
5a.	棘下窩形態幅	113	6.	中央最小径	18	
6.	棘上窩投影幅	51	7.	骨体最小周	64	
6a.	棘上窩形態幅	64	7(a).	中 央 周	69	
7.	肩甲棘投影長	138	8.	頭 周	131	
8.	棘基底長	80	9.	頭最大横径	40	
9.	肩峰最大幅	34	10.	頭最大矢状径	41	
11.	烏口突起最大長	43	11.	滑車幅	23	
12.	関節窩長	39	12.	小 頭 幅	18	
13.	関節窩幅	28	12(a).	滑車および小頭幅	46	
14.	関節窩深	6	12(b).	小 頭 幅	23	
2/1	肩甲骨示数	62.11	13.	滑 車 深	29	
2/21a	肩甲骨長示数	92.59	14.	尺骨頭窩幅	29	
5/2	棘下窩示数	111.00	15.	尺骨頭窩深	14	
6/2	棘上窩示数	51.00	6/5	骨体断面示数	78.26	
3/1	縁 示 数	86.34	7/1	長厚示数	21.69	
			9/10	頭断面示数	97.56	
			11/4	滑車上顆示数	23.00	

表18 尺骨計測值 (mm)

7 橈骨音	十測値 (mm)				古田 A 1 号人骨 男性 右
		古田 A 1 景人骨	1.	最大長	252
		男性 右	2.	機能長	222
1.	最大長	235	2(1).	肘頭小頭長	250
1b.	平行長	233	3.	最小周	36
2.	機能長	219	6.	肘頭幅	26
3.	最小周	41	6(1).	上尺骨幅	37
4.	骨体横径	18	7.	肘頭深	27
4a.	骨体中央横径	15	7(1).	肘頭鈎突距離	24
4(1).	小頭横径	22	8.	肘頭高	16
4(2).	頸横径	12	9.	橈側関節面前幅	8
5.	骨体矢状径	12	10.	橈側関節面後幅	15
5a.	骨体中央矢状径	1:1	11.	尺骨矢状径	13
5(1).	小頭矢状径	23	12.	尺骨横径	16
5(2).	頸矢状径	13	S	中央最小径	13
5(3).	小頭周	71	L	中央最大径	16
5(4).	頸 周	40	С	中 央 周	47
5(5).	骨体中央周	43	3/2	長厚示数	16.22
5(6).	骨下端幅	31	7/6	肘頭深示数	103.85
3/2	長厚示数	18.72	8/6	肘頭高示数	69.23
5/4	骨体断面示数	66.67	11/12	骨体断面示数	81.25
5a/4a	中央断面示数	73.33	S/L	中央断面示数	81.25

表20 脛骨計測值 (mm)

脛骨全長

脛骨長

脛骨最大長

顆距間距離

最大上端幅

上内関節面幅

上外関節面幅

上内関節面深

上外関節面深

最大下端幅

下端矢状径

中央最大径

中央横径

骨体周

最小周

9a/8a 栄養孔位断面示数

長厚示数

栄養孔位周

中央断面示数

栄養孔位最大径

栄養孔位横径

1.

la.

1b.

2.

3.

3a.

3b.

4a.

4b.

6.

7.

8.

8a.

9.

9a.

10.

10a.

10b.

9/8

10b/1

古田 A 1 号人骨 男性

左

333

339

328

316

74

32

29

48

41

47

28

31

18

21

75

84

69

64.29

67.74

20.72

右

333

338

329

317

75

33

29

49

40

49

36

29

30

19

22

76

84

71

65.52

73.33

21.32

			古田 A 1 号人骨 男性
		右	左
1.	最 大 長	410	409
2.	自然位長	405	404
3.	最大転子長	402	403
4.	自然位転子長	388	387
6.	骨体中央矢状径	26	24
7.	骨体中央横径	26	27
8.	骨体中央周	82	81
9.	骨体上横径	31	32
10.	骨体上矢状径	24	22
15.	頸垂直径	33	32
16.	頸矢状径	23	24
17.	頸 周	106	107
18.	頭垂直径	43	43
19.	頭 横 径	43	43
20.	頭 周	137	138
21.	上 顆 幅	79	78
8/2	長厚示数	20.25	20.05
6/7	骨体中央断面示数	100.00	88.89
10/9	上骨体断面示数	77.42	68.75
16/15	頸断面示数	69.70	75.00
19/18	頭断面示数	100.00	100.00

表21	膝蓋骨計測值	直 (mm)
1441		E (mm)

			古田 A 1 号人骨 男性
		右	左
1.	最大高	39	39
2.	最大幅	47	47
3.	最 大 厚	18	18
4.	関節面高	32	33
5.	内切面幅	19	21
6.	外切面幅	29	28
1/2	膝蓋骨高幅示数	82.98	82.98

表22 腓骨計測值 (mm)

			古田 A 1 号人骨 男性
		右	左
1.	最大長	328	327
2.	中央最大径	15	15
3.	中央最小径	11	11
4.	中央周	44	46
4a.	最 小 周	37	37
4b.	頸 横 径	11	11
4c.	頸矢状径	12	12
4(1).	上端幅	26	25
4(la).	上端矢状幅	26	25
4(2).	下端幅	23	21
4(2a).	下端矢状幅	23	22
3/2	中央断面示数	73.33	73.33
4a/1	長厚示数	11.28	11.31

表23 四肢骨比(最大長)

			古田 A 。 1 号人骨 男性
		右	左
橈	骨/上 腕 骨	79.66	-
橈	骨/大 腿 骨	57.32	_
上腕	i 骨/大 腿 骨	71.95	_
脛	骨/大 腿 骨	82.44	82.89

				1	5田 A 号人骨 男性
.H.	70	Ą	下	顎	
	近遠心径	頬(唇)舌径	ì	E遠心径	頰(唇)舌征
———— 右側 Ι ι	8.75	6.96	右側 I 1	5.90	5.49
I 2	7.88	6.24	I 2	6.27	5.94
С	7.89	8.04	С	6.88	7.71
P 1	7.03	8.92	Pι	6.98	7.87
P 2	6.72	8.77	P 2	7.52	8.36
M_2	8.77	12.25	\mathbf{M}_1	11.07	10.72
左側 I 2	7.96	6.17	M_2	10.97	10.71
С	7.83	8.50	Мз	11.19	10.02
P 2	6.97	8.88	左側 I ı	6.01	5.47
M_1	10.63	11.74	I 2	6.36	6.07
M_2	8.72	12.95	С	7.02	7.72
			P 1	7.03	7.45
			P 2	7.50	8.35
			M_1	11.07	10.77
			M_2	11.13	10.76
			M_3	11.50	10.34

総 括

長崎県北松浦郡小佐々町神崎免字古田にある古田A遺跡の1984年(昭和59年)に行なわれた範囲確認調査で、2体分の人骨が出土した。この人骨は古墳時代の終末に属する人骨と考えられており、また保存状態は良好なもので、長崎県では出土例の少ない時期の資料だけに、きわめて貴重なものである。また、人類学的観察や計測を行なった結果、興味ある所見も認められた。その所見は次のように要約することができる。

- 1. 1号人骨は、左側上半身部が撹乱を受けていたが、大部分は埋葬状態で出土し、2号人骨は散乱骨で、残存していたのは頭蓋の一部である。
- 2. 1号人骨は壮年の男性骨と推定した。
- 3. 1号人骨の頭蓋最大長は176mm, 頭蓋最大幅は139mm, バジオン・ブレグマ高は140mmで,頭蓋長幅示数は78.98, 長高示数は79.55, 幅高示数は100.72となり, 頭型は中・高・尖頭型に属している。また脳頭蓋の全体の径はやや小さい。
- 4. 顔面頭蓋の計測値は、中顔幅が101mm、顔高が115mm、上顔高は64mmで、顔示数(V)は113.86、上顔示数(V)は63.37となり、顔面頭蓋は低・広顔である。
- 5. 鼻根部は狭く、鼻骨の隆起も強く、鼻根部には現代人的特徴が認められる。
- 6. 下顎骨は、下顎角が著しく外反しており、またオトガイ隆起も著しく強い。
- 7. 上腕骨は、長さはあまり長いものではなく、骨体の扁平性は強くないが、三角筋粗面の発達は良好である。
- 8. 大腿骨も長さはあまり長いものではなく、また、粗線や骨体の後方への発達は強くはないが、骨体上部はやや扁平である。
- 9. 脛骨は長さが短く、骨体も細いが、扁平である。
- 10. 右大腿骨最大長からの推定身長値は158.39cm(Pearson)で、低身長である。
- 11. 以上述べてきたように、本例の頭蓋には現代人に通じる特徴が認められた反面、下顎骨にはこのような形態には似つかわしくない特異な形態も観察された。また同時にこのような特徴は西北九州地域の弥生時代人の特徴からは類推することのできないものであり、今後は遺跡の立地を考慮に入れ、周辺地域との関りあいをもっと明確にしていく必要があるようである。本例に認められた特徴が西北九州地域の古墳時代人に共通したものかどうかは、本県や周辺地域の例数が増加するのをまって、さらに詳しく考察していくつもりである。

《擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた、長崎県教育庁文化課の諸先生 方ならびに人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。》

参考文献

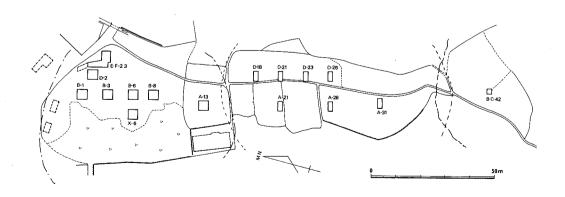
- 1. 栄田和行, 1967: 西北九州人大腿骨の人類学的研究。長崎医学会雑誌, 42:313-324.
- 2. 藤田恒太郎, 1949: 歯の計測規準について。人類学雑誌, 61:27-32.
- 3. 久松 巌, 1969:西北九州人脛骨の人類学的研究。長崎医学会雑誌, 44:718-728.
- 4. Howells. W. W, 1974: Cranial Variation in Man. Peabody Museum Papers, vol. 67.
- 5. Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd. l. Gustav Fisher Verlag, Stuttugart: 429-597.
- 6. 松下孝幸, 1981: 大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡(佐賀県呼子町文化財調査報告書1): 223-253.
- 7. 松下孝幸, 1982:山口県朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の人骨。朝田墳墓群 V (山口県埋蔵文化財調査報告第64集):179-206.
- 8. 松下孝幸,野田耕一,1983a:宮崎県高原町旭台地下式横穴出土の古墳時代人骨。宮崎県文化 財調査報告書,26:78-107.
- 9. 松下孝幸,他,1983b:山口県山口市朝田墳墓群第II地区出土の人骨-総括篇-。朝田墳墓群 VI(山口県埋蔵文化財調査報告第69集):219-242.
- 10. 松下孝幸,他,1983c:山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第7次発掘調査概報(豊北町埋蔵文化財調査報告2):19-30.
- 11. 松下孝幸, 1984:宮崎県野尻町大萩地下式横穴出土の古墳時代人骨。宮崎県文化財調査報告書, 27:53-111.
- 12. 森田 茂, 1950: 関東地方人頭蓋骨の人類学的研究。東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集, 第三輯: 1-59.
- 13. 内藤芳篤, 1971: 西北九州出土の弥生時代人骨。人類学雑誌, 79:236-248.
- 14. 内藤芳篤, 分部哲秋, 1980:清水1号古墳出土の人骨について。清水古墳群・野寺遺跡・林源 衛門墓(熊本県文化財調査報告第41集):22-28.
- 15. 鈴木 尚, 1963:日本人の骨。岩波書店, 東京。
- 16. 八木 治,1970:西北九州人上腕骨の人類学的研究。長崎医学会雑誌,45:22-33.

N おわりに

古田遺跡の立地は砂丘上に位置しており、その砂丘の発達に合わせて遺跡の拡がりも見られる。この地形はもともと、日本本土最西端の碑のある領域の部分は島として独立していたもので、島と島が繋ったのは縄文時代以降と考えられる。

遺跡の拡がりは、先ず南の奥部に縄文時代中期と後期の土器の出土を若干見たが、この付近は枝状に谷が入り込んでおり、あるいは、その周辺にも及んでいるとも考えられ古田B地点も好条件を備えている。縄文晩期についてはD-18からA-31グリッドの間において包含層が認められ、この時期における砂丘の発達は中央部まで達していたことが窺われる。土器から判断すると、条痕文を主体としたものが多く、精製土器では黒川式土器も見られる。また組織痕土器も1点であるが出土しており、全体的には晩期中葉である。この時期には至近の距離にある宮ノ本遺跡の影響を強く受けていたと思われるが、本遺跡の場合は小規模かつ短期間のうちに終わっている。弥生式土器は包含層が確認されないまま数点の出土にとどまった。墓地の確認も出来ず、生活の痕跡は窺えない。

今回の調査の中で多くの資料が得られたのが古墳時代の遺物である。土器が殆どを占め、土師器、須恵器が主である。時期的には4世紀から8世紀まで幅広い時代の差が見られるが、主体は、4世紀後半から5世紀初頭である。県下におけるこの時期のまとまった資料としては、田平町里田原遺跡や大村市大堂遺跡があげられる。またこれらの土器の他に注目すべき遺物の出土があった。それは、陶質土器と無文土器である。陶質土器は3点であるが、1点は口縁部を除きほぼ復原可能な、全面に叩きで仕上げられた赤みを帯びた軟質の土器であり、灰色みを帯びた軟質のものも含まれ、また無文土器の口縁につけられる断面円形の紐状のものも見られた。県下では、対馬、壱岐を別とすれば、半島系の遺物の出土は限られてくる。



第28図 調査区域と各時代の拡がり

五島列島の北端に位置する小値賀町の属島黒島に、東に突き出した細い岬があり神ノ崎遺跡が所在する。この遺跡は、弥生前期末から古墳時代後期にかけての墓地が営まれ、板石積の石棺(石室)墓などに伴って良好な資料が出土している。その中で5世紀後半~末頃と推定される31号石棺墓より陶質土器が発見されている。報文によると、器表には全面に細かい縄蓆文を縦位に施文し、胴部に2本の沈線がめぐる灰色を呈した、軟質の壺型土器である。本遺跡の場合は格子状の叩きであるが、時期的に考えても大差ない。また無文土器については、里田原遺跡において弥生中期頃に伴って1点確認されている。ただ本資料の場合は丸い部分だけであり、確実な比較資料に貧するところがある。本遺跡における半島系の資料の出土は、対馬・壱岐・五島と本土の西北沿岸地域との交流の一端を示すものと考えられる。

遺構の面では柱穴の検出が認められたが、地質が砂地ということや、範囲確認という性格上 今後の機会にゆだねることにした。

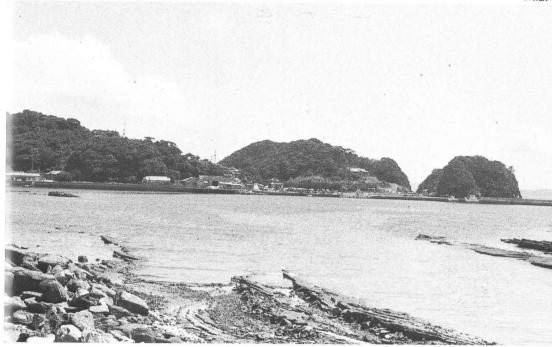
調査中期待されたことは、人骨が何体出土するかという点にあった。イモガマを掘った際出土したと言われた人骨は、数体に及んだということであったが、良好な状況では1体のみであった。しかし、この仰臥伸展葬の男性人骨は上面に配石があり、副葬品として刀子およびアワビ貝が置かれていた。アワビ貝やイノシシ下顎が被葬者の頭部や体部に置かれていた例は、五島列島の福江島に位置する大浜遺跡や、有川町浜郷遺跡に出土例を求めることが出来るが、これらの時期は弥生中期を主体としている。従って本資料とは時期的な差が見られるが、魔除的な習俗として引き継がれてきたものであろうか。

いずれにしても古田遺跡の場合は、縄文時代から古墳時代に至るまで、海に依存した生活環境が考えられるのである。最後に、今回の調査は範囲確認の域を出ない基礎的な調査であり、初期の目的は達したが、遺跡の全体像を完全に把握するまでには至っていない。しかし今後はB地点ともども、遺跡の保護と活用を考えていくことが必要であろう。 (安楽)

- 註1 佐世保市教育委員会 『宮の本遺跡』 1981
 - 2 田平町教育委員会 『里田原遺跡』 田平町文化財調査報告書第2集 1960
 - 3 長崎県教育委員会 「大堂遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ』1979 長崎県文化財調査報告書第45集
 - 4 小値賀町教育委員会 『神ノ崎遺跡』 小値賀町文化財調査報告書第4集 1984
 - 5 長崎県教育委員会 『五島遺跡調査報告』 長崎県文化財調査報告書第2集 1964
 - 6 小田富士雄 「五島列島の弥生文化」 ―総説編― 長崎大学医学部解剖学第二教室 人類学・考古学研究報告 2 1970

义

版



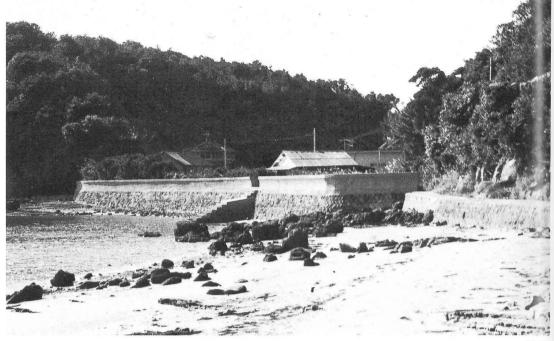
遠景



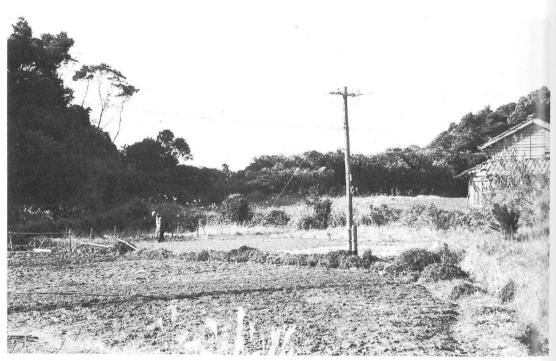
近景

古田A遺跡

図版2



遠景

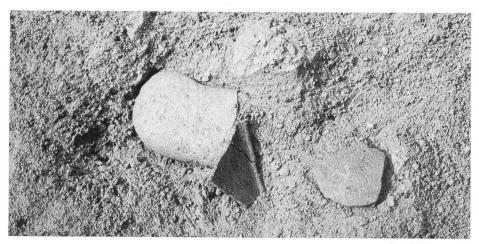


古田B遺跡

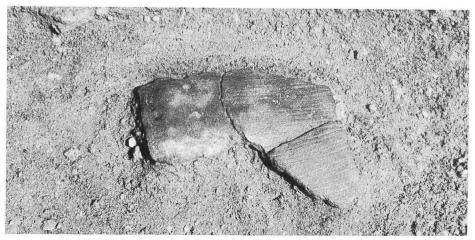
近景



発掘調査

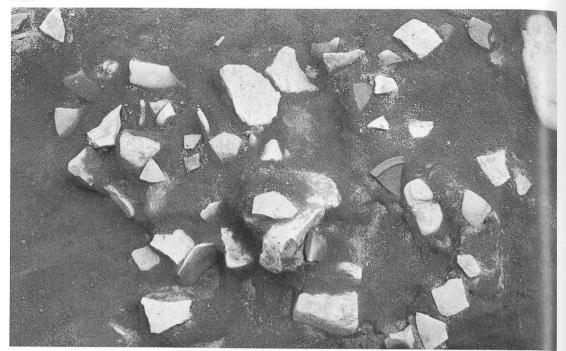


出土状況

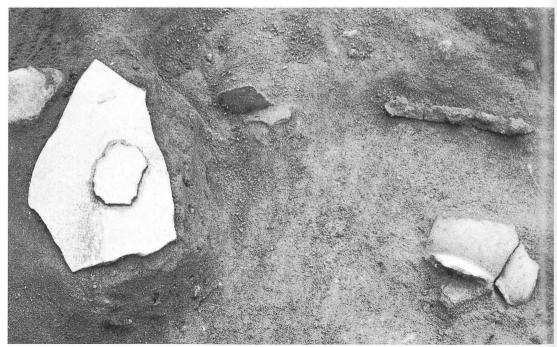


調査・出土状況

出土状況



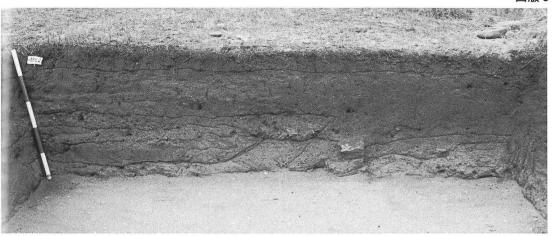
出土状況



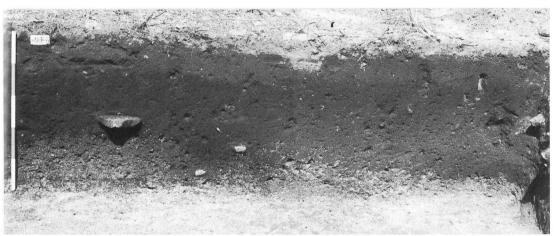
遺物出土状況

出土状況

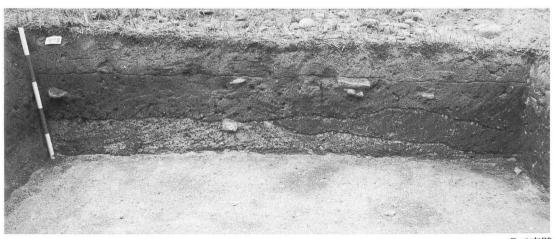
図版 5



B-3東壁

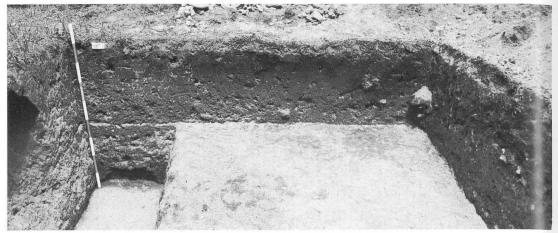


B-6東壁



土層

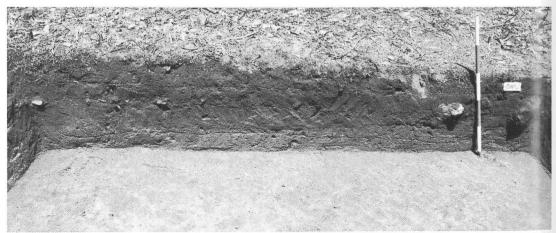
B-8東壁



A-13東壁



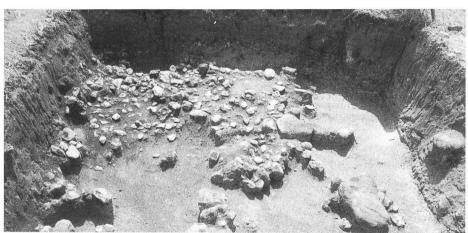
A-21北壁



D-26北壁



出土状況



B-3区 集石状況

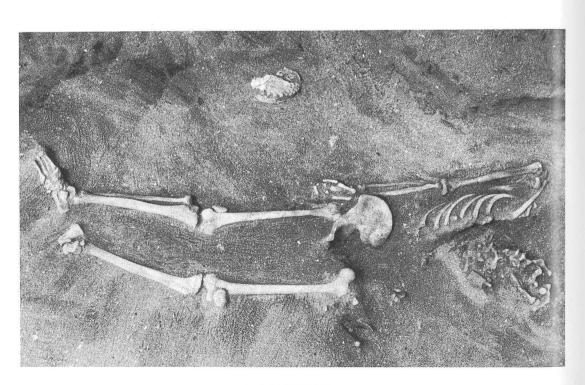


調査・出土状況

人骨発掘調査

図版 8





1号人骨出土状況



説明会



説明会・遺物出土状況

出土状況



出土状況



遺物出土状況

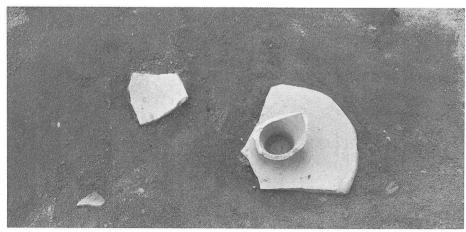
出土状況



出土状況

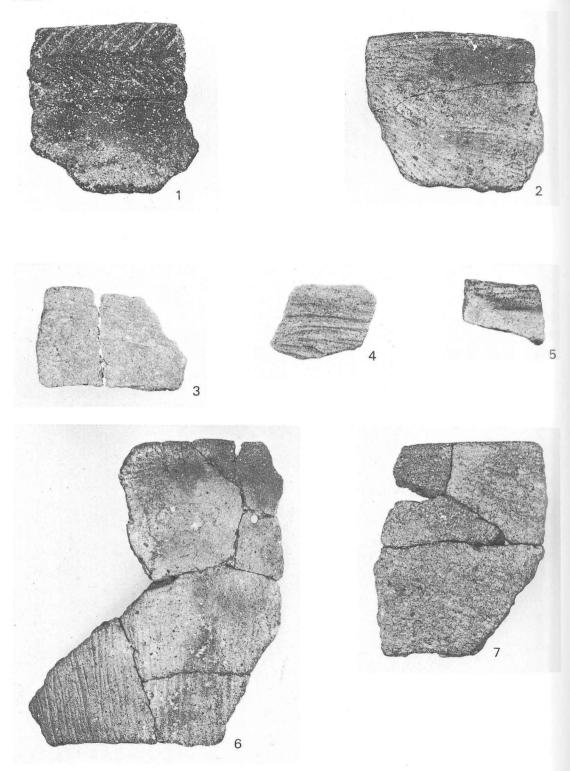


発掘調査



調査・出土状況

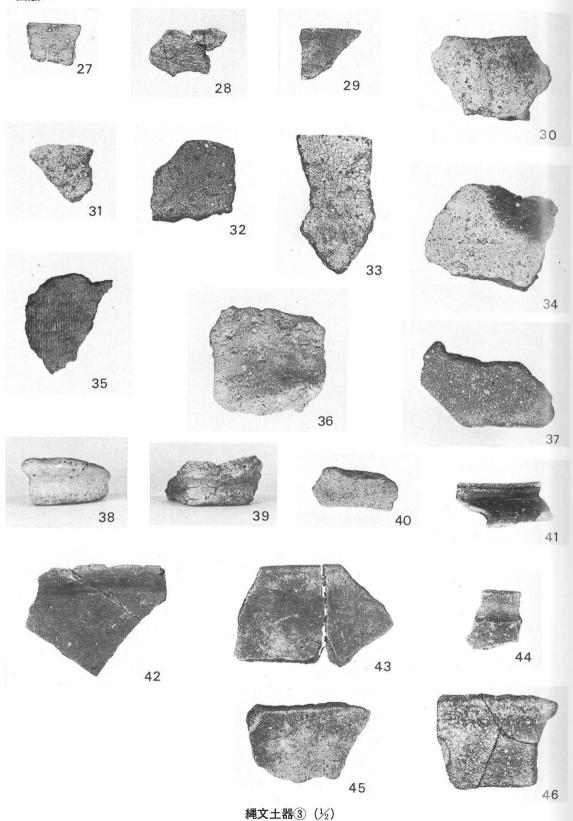
出土状況



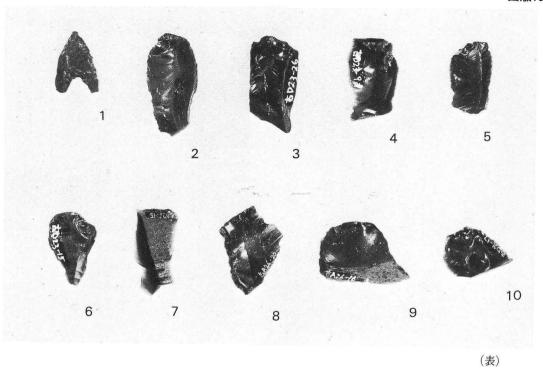
縄文土器① (½)

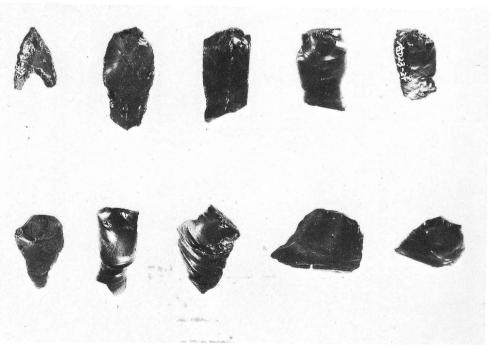
縄文土器② (½)



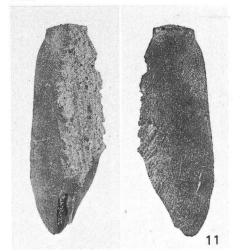


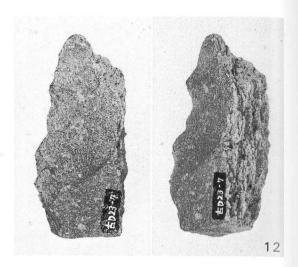
- 83 -

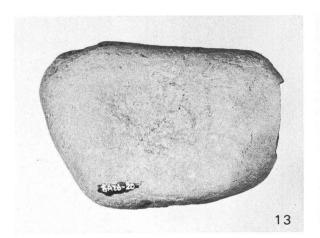


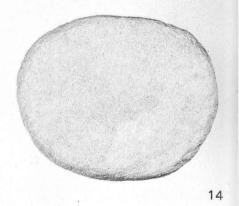


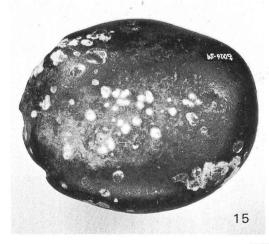
石器① (%)

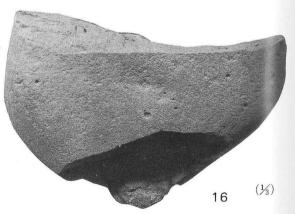






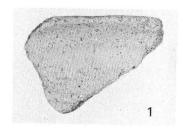


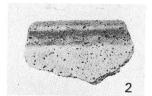




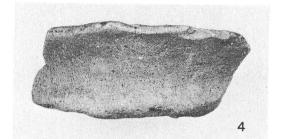
石器② (½)

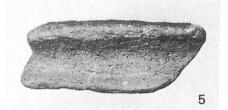


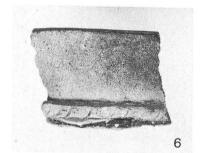






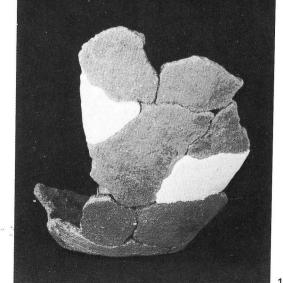










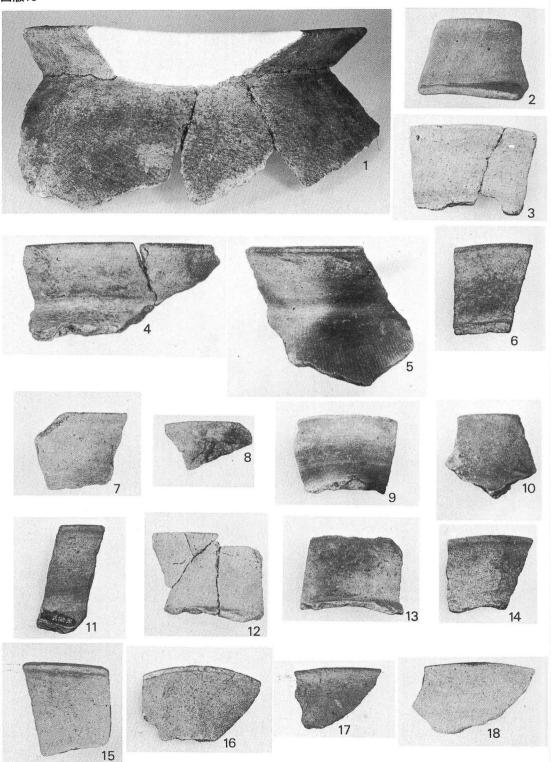




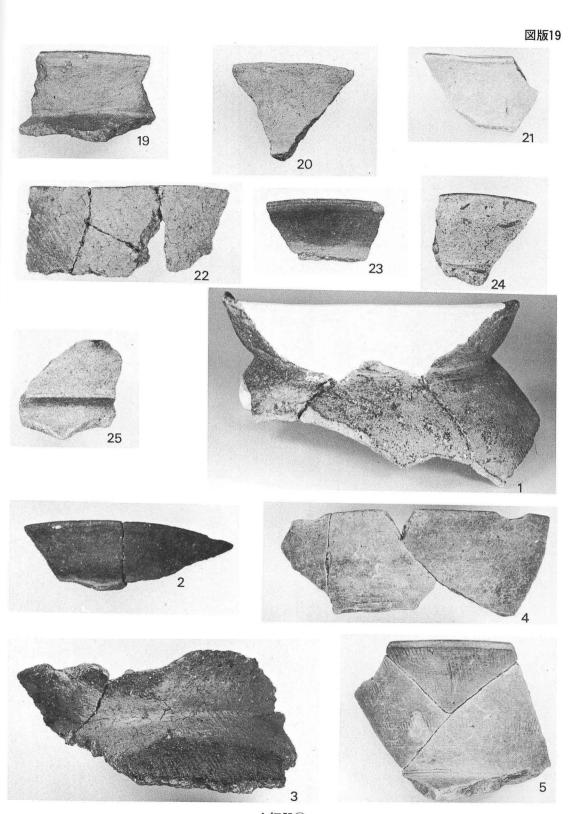
弥生土器

10

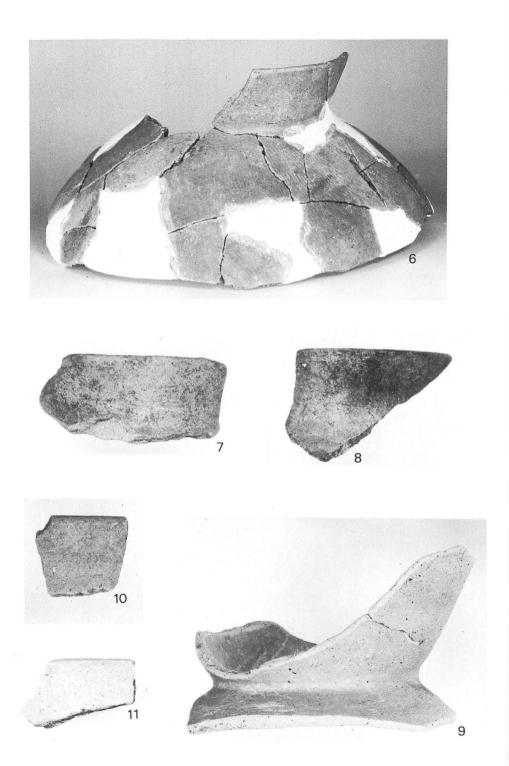
図版18



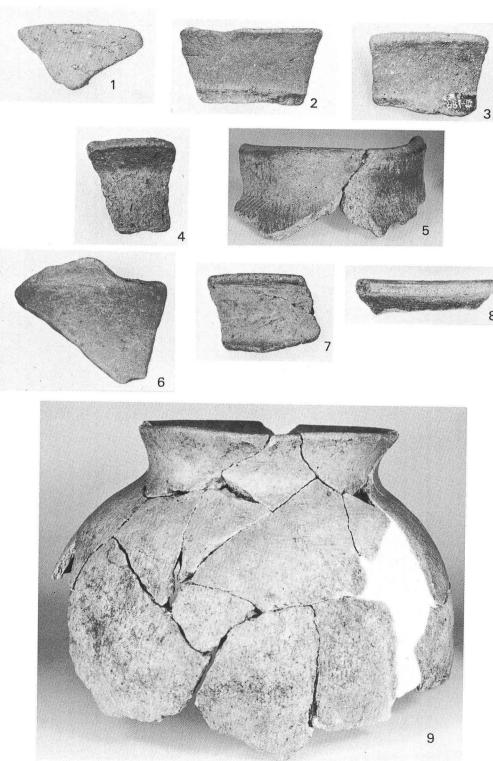
土師器①



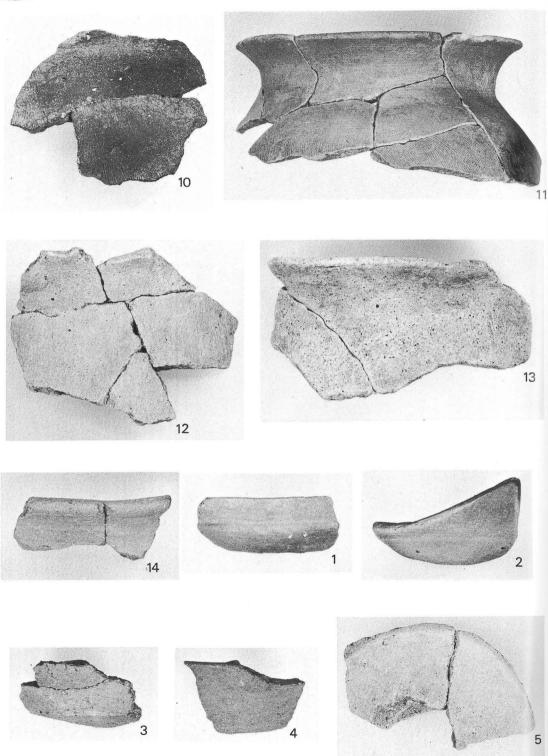
土師器②



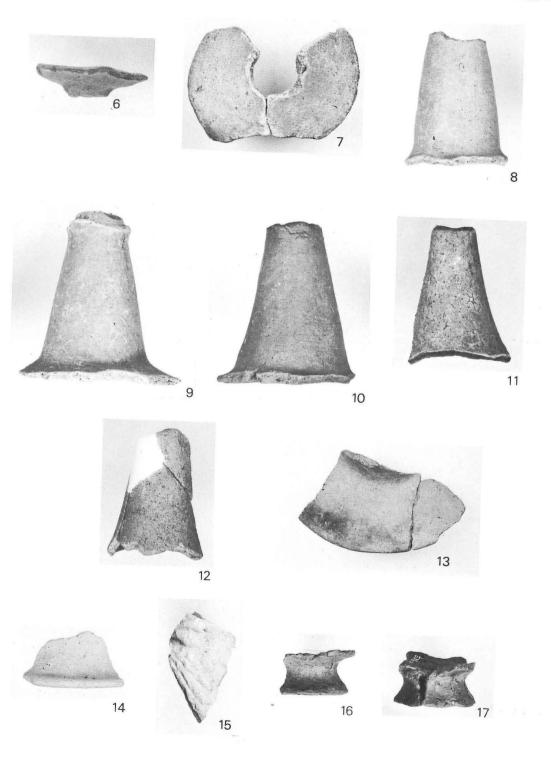
土師器③



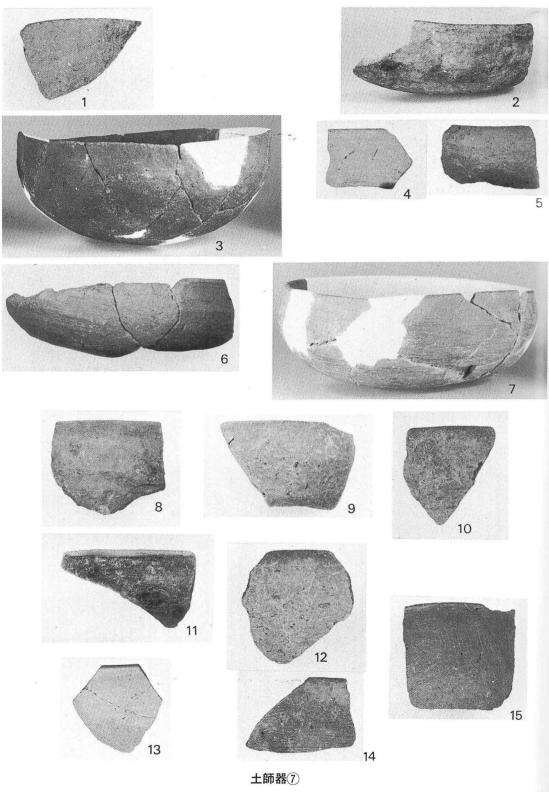
土師器④

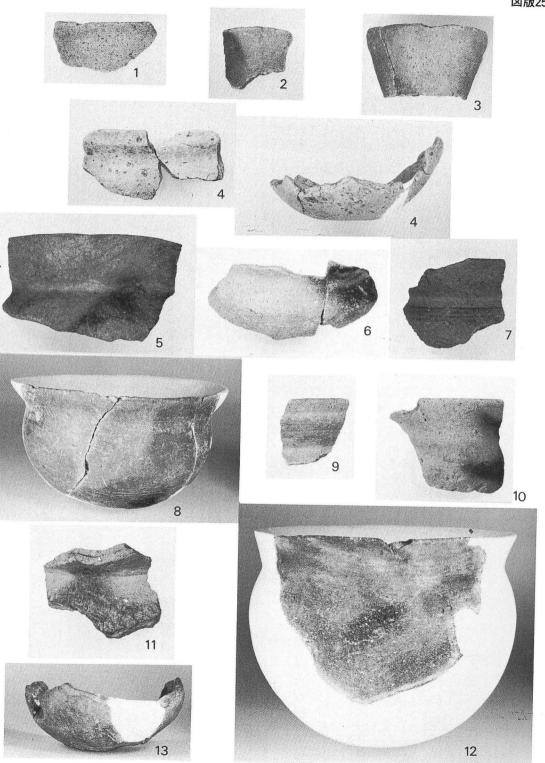


土師器⑤

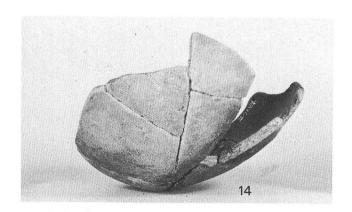


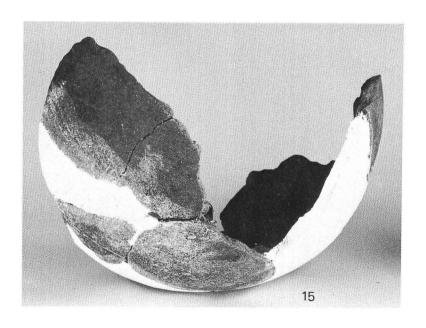
土師器⑥





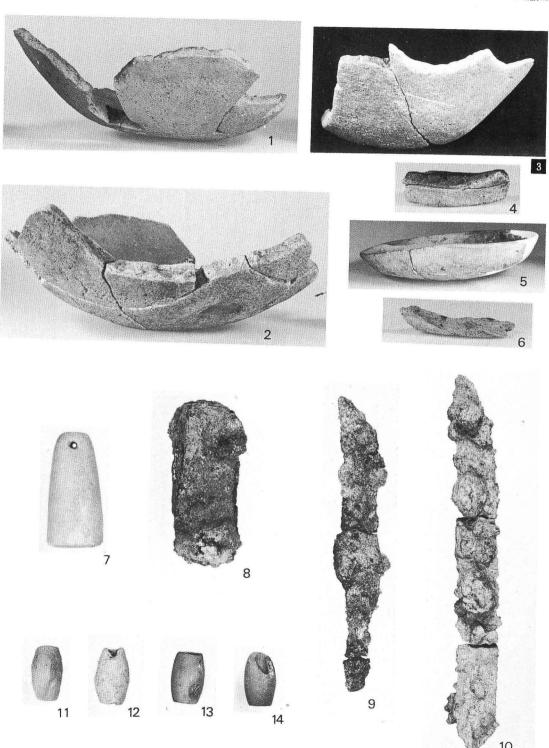
土師器⑧



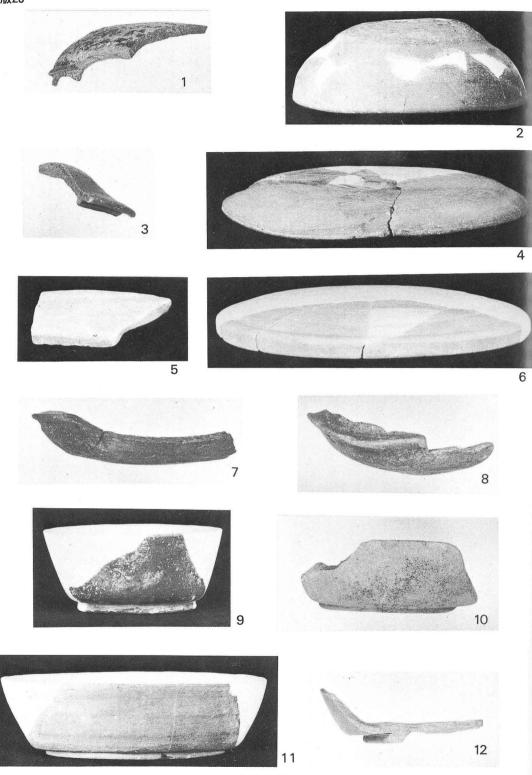


土師器⑨

図版27

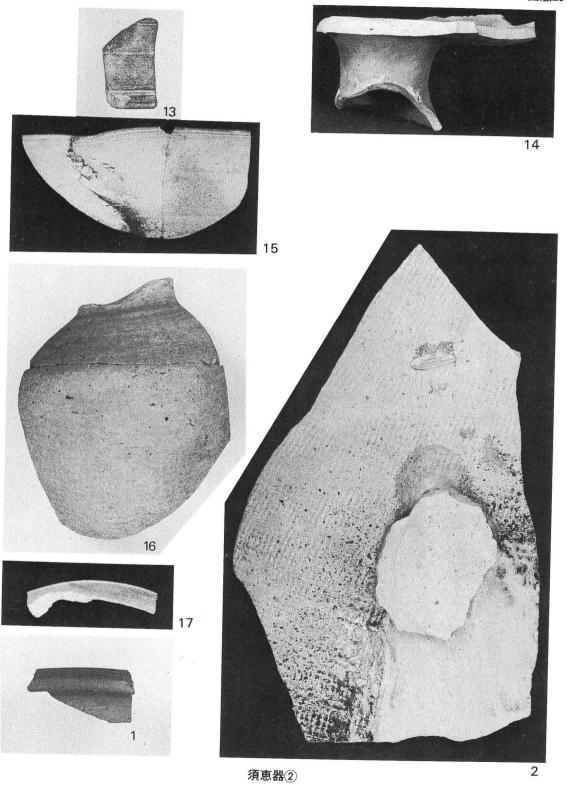


土師器①鉄器

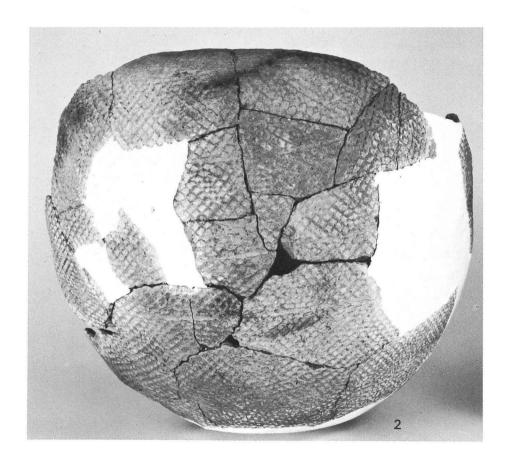


須恵器①



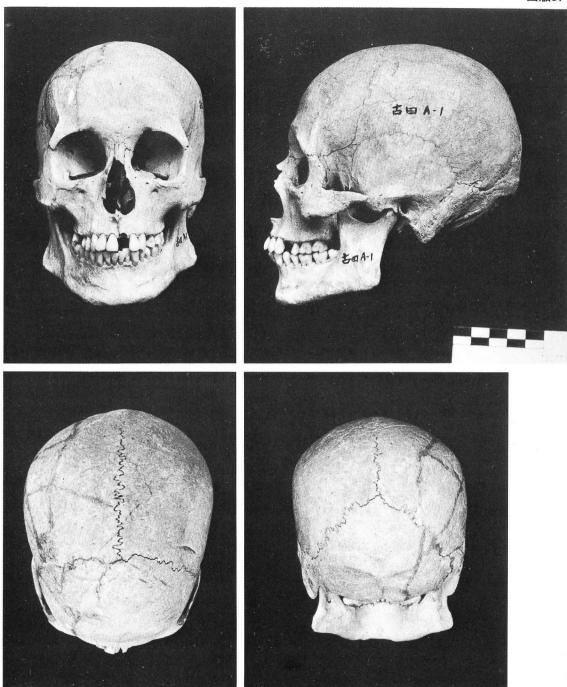




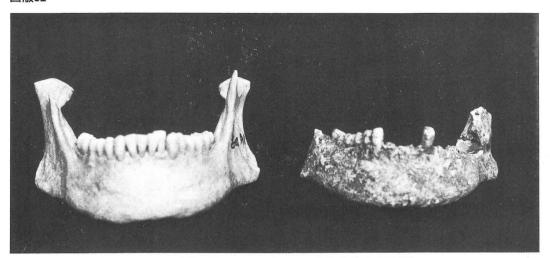




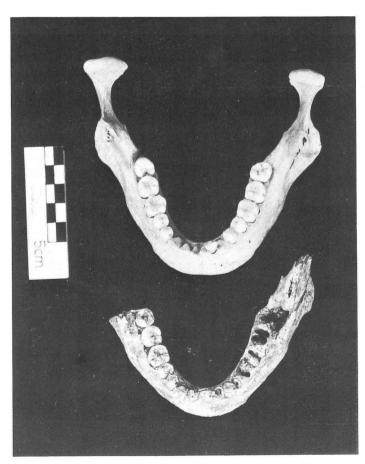
朝鮮半島系の土器



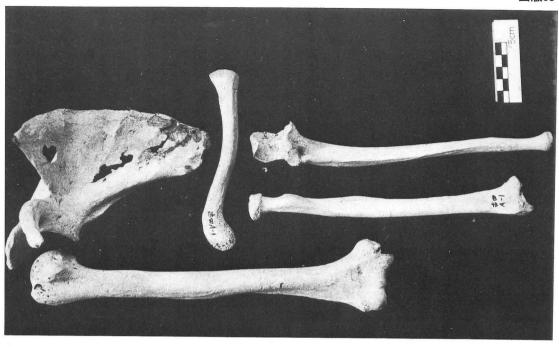
1 号人骨(男性·壮年)上左:正面,上右:側面,下左:上面,下右:後面

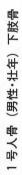


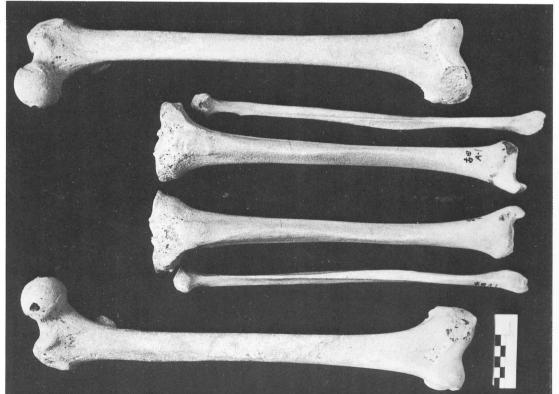
下顎骨正面(左:1号人骨,右:清水古墳出土人骨)



下顎骨上面(上:1号人骨,清水古墳出土人骨)









調査に参加した人達

小佐々町文化財調査報告書第1集

古 田 遺 跡

昭和60年3月31日

発行 長崎県小佐々町教育委員会 〒857-04 北松浦州佐々町西川内紀43番地 印刷 川口印刷株式会社 〒851-01 長崎市田中町1020-7